

期 日 二〇二三年十月八日(土)・九日(日)
会 場 早稲田大学早稲田キャンパス・オンライン併用

日本中国学会
第七十四回大会要項

日本中国学会

大会参加の方法について

今大会は、会場とオンライン（Youtube live）の併用での開催となります。お手数ですが、会場参加・オンライン参加を問わず、下記の手続きをお願いいたします。

1. 大会参加費をお振り込みください

同封しております振替用紙を用いまして、9月23日（金）までに指定の口座まで大会参加費をお支払い下さい。締め切り以降にお振り込み頂いた場合、対応できませんので十分にご注意ください。

2. 対面・オンラインともに、下記フォームにて必要事項を入力ください

下記QRコードを読み取り、サイトにアクセスいただき、9月23日（金）までに必要な事項をご入力ください。

【大会参加 事前参加登録フォーム】



第74回大会特設サイトからもアクセス頂けます。
迷惑メール等の設定をされている場合は、
「japansinology74@gmail.com」の受信を許可頂けま
すよう設定をお願い致します。

3. 大会の日が近づきましたら、オンライン参加用URLと発表資料のパスワードを記したメールをお送り致します。

フォームで回答頂きましたメールアドレス宛に大会が近づきましたらオンライン参加URLと資料のパスワードをお送りします。

【備考】

- 対面で参加を予定していて、急遽オンラインに変更される場合などが想定されますが、ご予約が変わった場合、大会事務局への御連絡は不要です。
- 対面でお越しになる際は発熱等がございましたらばお控え頂けますようお願い申し上げます。
- そのほか、随時大会特設サイトにてご案内申し上げます。



【第74回大会特設サイト】

<https://nippon-chugoku-gakkai-74.org/>

【大会準備会問い合せ先】

japansinology74@gmail.com

拝啓

時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、来る十月八日（土）及び九日（日）の両日で、日本中国学会第七十四回大会を早稲田大学にて開催致します。会場及びオンラインのハイブリッド形式で開催いたします。万障お繰り合わせの上、ご参加くださいますようお願い申し上げます。大会開催に際しまして早稲田大学図書館所蔵の国宝二点など、早稲田が所蔵する貴重な漢籍資料の展示の企画もご用意しております。

オンライン・来場ともに、ご参加の方は、同封の振込用紙を使用し、二〇二二年九月二十三日（金）までにお振り込みください。振替受領証を以て領収書に代えさせていただきます。また、オンライン・来場ともに事前に報告資料等のパスワード等をお送りする関係で、大会参加費をお振り込み頂いた後で、フォームにて必要事項を送信頂ければと存じます。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

二〇二二年八月二十日

敬具

日本中国学会理事長 大木 康

第七十四回大会準備会代表 渡 邊 義 浩

会員各位

日本中国学会第七十四回大会
2022年10月8日(土)・9日(日)

日 時	行 事	会 場	
8日 (土)	9:30	受付開始	第二会場 大隈大講堂
	10:00	開会式	第二会場 大隈大講堂
	10:30～ 12:05	書評シンポジウム①	第一会場 大隈小講堂
		研究報告 II. 文学・語学部会	第二会場 大隈大講堂
		研究報告 IV. 歴史部会	第三会場 小野記念講堂
		昼休憩	
	13:00～ 16:00	研究報告 I. 哲学・思想部会	第一会場 大隈小講堂
		書評シンポジウム②	第二会場 大隈大講堂
研究報告 IV. 歴史部会 III. 日本漢学部会		第三会場 小野記念講堂	
17:00	総会	第二会場 大隈大講堂	
9日 (日)	9:30	受付開始	第二会場 大隈大講堂
	10:00～ 12:05	研究報告 I. 哲学・思想部会	第一会場 大隈小講堂
		研究報告 II. 文学・語学部会	第二会場 大隈大講堂
		次世代シンポジウム	第三会場 小野記念講堂
		昼休憩	
	13:00～ 15:05	研究報告 IV. 歴史部会	第一会場 大隈小講堂
		書評シンポジウム③	第二会場 大隈大講堂
	研究報告 III. 日本漢学部会	第三会場 小野記念講堂	
15:30	閉会式	第二会場 大隈大講堂	

- ◆理事会・評議員会、各種委員会については、今年度は別途オンラインで開催。
- ◆今年度は三密回避の観点から写真撮影は行いません。
- ◆大会期間中、早稲田大学中央図書館にて特別展「早稲田の東亜貴重資料展」を開催しております。早稲田が持つ国宝が二点並ぶ貴重な機会でございます。オンラインでも御覧頂けますので、是非ご高覧頂ければと存じます。

(詳細は57・58ページを御覧下さい)

◆大会本部（学会事務局／大会準備会控室）

26号館（大隈タワー）11階 1101会議室・1102会議室

◆休憩室

7号館 301号室・302号室・303号室

◆当日受付／クローク

大隈講堂1階 中央入口内

※8日（土）の荷物預かりは、午後6時で終了致します。総会の後にお引き取りをお願い致します。

◆書店・出版社展示 大隈講堂 2階



大隈記念講堂



小野記念講堂

時間帯一覧表

		第三会場 (Live 3) 小野記念講堂
8日 (土)	9:30~9:50	【開会式】大隈講堂 (大講堂) 歴史部会
	10:00~10:25	IV-1 仙石 知子(38)
	10:30~10:55	IV-2 水野 卓(39)
	11:10~11:35	IV-3 渡邊 将智(40)
	11:35~12:05	IV-4 長谷川 隆一(41)
		【昼休憩】
		歴史部会/日本漢学部会
	13:00~13:25	IV-5 田中 靖彦(42)
	13:30~13:55	IV-6 袴田 郁一(43)
	14:00~14:25	IV-7 顧 嘉晨(44)
	14:30~14:55	IV-8 陳 路(45)
	15:30~15:55	III-1 具 惠珠(46)
	16:00~16:25	III-2 武 穎(47)
	17:00~	【総会】大隈講堂 (大講堂)
9日 (日)		日本漢学部会
	10:00~12:05	【パネルディスカッション】(次世代シンポジウム) (55・56) ○長尾 直茂・○高山 大毅 韓 淑婷・宋 晗・水上 雅晴
		【昼休憩】
		日本漢学部会
	13:00~13:25	III-3 靳 春雨(57)
	13:35~13:55	III-4 陳 靈俠(58)
	14:10~14:35	III-5 辻井 義輝(59)
	14:40~15:05	
15:30~	【閉会式】大隈講堂 (大講堂)	

※ () 内の数字は、発表要旨の掲載ページを示しています。

※ (Live) はyoutube liveのチャンネルを指します。

◆大会参加費 (会場・オンライン共通) 2,000円

◆ご案内

- ・キャンパス内は指定喫煙所のみ喫煙可能です。ご協力をお願いいたします。
- ・大隈記念講堂 (大講堂・小講堂)、小野記念講堂はいずれも飲食禁止となっております。何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。
- ・今年度は、感染症拡大防止の観点から、大会準備会でお弁当のご予約は承っておりません。恐れ入りますが、各自でお願いしたく存じます。また、集合写真の撮影もございません。ご了承頂ければと存じます。
- ・8日 (土) は大隈講堂脇の学食が営業予定です。また、キャンパス内にはコンビニエンスストア等もございます。周辺には飲食店も多くございます。
- ・9日 (日) は学食や近隣の飲食店の多くがお休みとなります。事前に昼食を持参されるか、近くのコンビニエンスストアをご利用ください。
- ・臨時託児所の利用には事前に申し込みが必要です。詳細については60~61ページをご覧ください。

研究発表の会場・

		第一会場 (Live 1) 大隈講堂 (小講堂)	第二会場 (Live 2) 大隈講堂 (大講堂)
8日 (土)	9:30~9:50	【開会式】大隈講堂 (大講堂)	
		哲学・思想部会	文学・語学部会
	10:00~10:25	【書評シンポジウム】 パネル I (52)(10:00~11:00)	II-1 内藤 正子(28)
	10:30~10:55	○三浦 秀一・岩本 真利絵 ・早川 太基・陳 佑真	II-2 陳 錦清(29)
	11:10~11:35	/	II-3 徐 新源 (30)
	11:35~12:05		II-4 鈴木 達明(31)
		【昼休憩】	
		哲学・思想部会	文学・語学部会
	13:00~13:25	I-1 徐 燕斌 (16)	【書評シンポジウム】 パネルII(53)(13:00~14:00)
	13:30~13:55	I-2 黒田 祐介 (17)	○佐野 誠子・宇野 瑞木 ・千賀 由佳・吉田 勉
	14:00~14:25	I-3 王 瑞 (18)	/
	14:30~14:55	I-4 夏 雨 (19)	
15:30~15:55	I-5 劉 青 (20)	II-5 馮 心鶴(32)	
16:00~16:25	I-6 徐 昊 (21)	II-6 李 家橋(33)	
17:00~	【総会】大隈講堂 (大講堂)		
9日 (日)		哲学・思想部会	文学・語学部会
	10:00~10:25	I-7 伊藤 涼(22)	II-7 汪 洋(34)
	10:30~10:55	I-8 吉岡 佑馬(23)	II-8 喬 亜寧(35)
	11:10~11:35	/	II-9 龔 月婷(36)
	11:40~12:05		II-10 高 尚(37)
		【昼休憩】	
		歴史部会	文学・語学部会
	13:00~13:25	IV-9 渡邊 義浩(24)	【書評シンポジウム】 パネルIII(54)(13:00~14:00)
	13:35~13:55	IV-10 佐川 英治(25)	○鈴木 将久・菅原 慶乃 ・松浦 智子・宮内 肇
	14:10~14:35	IV-11 柿沼 陽平(26)	/
14:40~15:05	IV-12 小島 毅(27)		
15:30~	【閉会式】大隈講堂 (大講堂)		

※ () 内の数字は、発表要旨の掲載ページを示しています。

※ (Live) はyoutube liveのチャンネルを指します。

日本中国学会第七十四回大会プログラム

I 第一会場（大隈講堂〔小講堂〕）

十月八日（土）午前 書評シンポジウム

パネル I・福谷 彬著『南宋道学の展開』（十時～十一時）

○三浦 秀一（東北大学）

岩本真利絵（釧路公立大学）

早川 太基（神戸大学）

陳 佑真（帝京大学）

十月八日（土）午後 哲学・思想部会

I-1 二つの武士道論―近代日中両国の比較から（十三時～十三時二十五分）

徐 燕斌（東京大学大学院）

司会 佐藤 鍊太郎（北海道大学名誉教授）

I-2 羅近溪における「赤子の心」と本末格物説（十三時～十三時五十五分）

黒田 祐介（東洋大学大学院）

司会 三浦 秀一（東北大学）

I-3 有司繩尺の差異と統合

—『類篇歴挙三場文選』「詩義」からみる元代科挙の地域による答案判定基準について—

(十四時～十四時二十五分)

王 瑞 (名古屋大学大学院)

司会 三浦 秀一 (東北大学)

I-4 明清時代における江南地域女性天文学者の研究—王貞儀を例として(十四時三十分～十四時五十五分)

夏 雨 (明海大学)

司会 野村 鮎子 (奈良女子大学)

I-5 元代の養生書と日本的伝播(十五時三十分～十五時五十五分)

劉 青 (大阪公立大学・東京大学非常勤講師)

司会 浦山 きか (東北大学)

I-6 会盟礼を通して見る春秋・戦国時代宗教観の変化(十六時～十六時二十五分)

徐 昊 (愛知大学大学院)

司会 近藤 浩之 (北海道大学)

十月九日（日）午前 哲学・思想部会

I—7 張湛の思想について—玄学の黄昏—（十時～十時二十五分）

伊藤 涼（早稲田大学大学院）

司会 中島 隆博（東京大学）

I—8 『老子義疏』初探—思想構造および成立背景を中心に—（十時三十分～十時五十五分）

吉岡 佑馬（広島大学大学院）

司会 中島 隆博（東京大学）

十月九日（日）午後 歴史部会

IV—9 諸葛亮の軍事行動と兵法（十三時～十三時二十五分）

渡邊 義浩（早稲田大学）

司会 矢田 博士（愛知大学）

IV—10 孫呉政治史と赤壁の戦い（十三時三十五分～十三時五十五分）

佐川 英治（東京大学）

司会 矢田 博士（愛知大学）

IV—11 秦による楚地支配と被征服民（十四時十分～十四時三十五分）

柿沼 陽平（早稲田大学）

司会 大西 克也（東京大学）

IV—12 一世一元と踰年改元—明朝における定制化の経緯について—（十四時四十分—十五時五分）

小島 毅（東京大学）

司会 鶴成 久章（福岡教育大学）

II 第二会場（大隈講堂〔大講堂〕）

十月八日（土）午前 文学・語学部会

II—1 字本位理論から見る中国語の主題と話題（十時—十時二十五分）

内藤 正子（早稲田大学）

司会 本間 直人（日本大学非常勤講師）

II—2 西晋碑誌に描かれた女性についての一考察—「晋任城太守夫人孫氏之碑」を中心に—

（十時三十分—十時五十五分）

陳 錦清（京都大学大学院）

司会 矢田 博士（愛知大学）

II—3 韋応物の声律と詩体選択について（十一時十分—十一時三十五分）

徐 新源（京都大学大学院）

司会 土谷 彰男（早稲田大学）

II-4 韓愈「孟東野を送る序」の「鳴」について（十一時四十分～十二時五分）

鈴木 達明（愛知教育大学）

司会 浅見 洋二（大阪大学）

十月八日（土）午後 書評シンポジウム／文学・語学部会

パネルⅡ・福田 素子著『債鬼転生―討債鬼故事に見る中国の親と子―』（十三時～十四時）

○佐野 誠子（名古屋大学）

吉田 勉（北海道教育大学釧路校）

千賀 由佳（龍谷大学）

宇野 瑞木（専修大学）

II-5 唐代豪俠小説「車中女子」について―仏教的要素に着目して―（十五時三十分～十五時五十五分）

馮 心鶴（京都大学大学院）

司会 溝部 良恵（慶應義塾大学）

II-6 元雜劇「一折換韻」についての考察（十六時～十六時二十五分）

李 家橋（早稲田大学大学院）

司会 小松 謙（京都府立大学）

十月九日（日）午前 文学・語学部会

Ⅱ―7 趙翼の双声疊韻対偶研究とその意義について（十時―十時二十五分）

汪 洋（九州大学大学院）

司会 丸井 憲（早稲田大学・専修大学非常勤講師）

Ⅱ―8 張資平の前期小説にみる留日学生と恋愛（十時三十分―十時五十五分）

喬 亜寧（神戸大学大学院）

司会 鈴木 将久（東京大学）

Ⅱ―9 盧隱の小説「碧波」に描かれた蘇雪林―二人の女性作家の關係性の再考―（十一時十分―十一時三十五分）

龔 月婷（名古屋大学大学院）

司会 濱田 麻矢（神戸大学）

Ⅱ―10 黄碧雲の小説における魯迅の受容について―死生觀を中心に―（十一時四十分―十二時五分）

高 尚（神戸大学大学院）

司会 藤井 省三（名古屋外国語大学）

十月九日(日) 午後 書評シンポジウム

パネルⅢ・田村 容子著『男旦^{ナシタシ}(おんながた)』とモダンガールー—二〇世紀中国における京劇の現代化—』
(十三時～十四時)

○鈴木 将久(東京大学)

菅原 慶乃(関西大学)

松浦 智子(神奈川大学)

宮内 肇(立命館大学)

Ⅲ 第三会場(小野記念講堂)

十月八日(土) 午前 歴史部会

Ⅳ—1 歴史物語の形成—劉向『列女伝』巻七 孽嬖伝「周幽褒姒」を中心に(十時～十時二十五分)

仙石 知子(二松学舎大学)

司会 二階堂 善弘(関西大学)

Ⅳ—2 『春秋左氏伝』の素材—「君主の称謂」を手がかりとして—(十時三十分～十時五十五分)

水野 卓(愛媛大学)

司会 二階堂 善弘(関西大学)

IV—3 後漢章帝の統治と宗室・外戚（十一時十分～十一時三十五分）

渡邊 将智（就実大学）

司会 渡邊 義浩（早稲田大学）

IV—4 後漢～六朝における処士（十一時四十分～十二時五分）

長谷川 隆一（早稲田大学）

司会 安藤 信廣（東京女子大学名誉教授）

十月八日（土）午後 歴史部会／日本漢学部会

IV—5 南宋における孫吳政権論をめぐる一考察（十三時～十三時二十五分）

田中 靖彦（実践女子大学）

司会 渡邊 義浩（早稲田大学）

IV—6 孫盛の史学の検討―裴松之の先駆として―（十三時三十分～十三時五十分）

袴田 郁一（早稲田大学院）

司会 安藤 信廣（東京女子大学名誉教授）

IV—7 李楷の遺民論について（十四時～十四時二十五分）

顧 嘉晨（東京大学大学院）

司会 伊東 貴之（国際日本文化研究センター）

IV—8 儒教史観と神国思想の相克—室町時代の「呉太伯後裔説」について（十四時三十分～十四時五十五分）

陳路（関西大学大学院）

司会 水上 雅晴（中央大学）

III—1 古代日本漢文学における音声と書記の往還—〈訓読〉の美と文字化について—

（十五時三十分～十五時五十五分）

具 惠珠（国文学研究資料館）

司会 静永 健（九州大学）

III—2 景徐周麟の作品における「黍離の嘆き」について

武 穎（名古屋大学大学院）

司会 堀川 貴司（慶應義塾大学）

十月九日（日）午前

パネルディスカッション（次世代シンポジウム）（十時～十二時五分）

日本漢学を／で考える

○長尾 直茂（上智大学）

○高山 大毅（東京大学）

韓 淑婷（関西大学）

宋 晗（フェリス女学院大学）

水上 雅晴（中央大学）

十月九日（日）午後 日本漢学部会

Ⅲ―3 経学者佐藤一斎の填詞―新見六首をめぐって（十三時―十三時二十五分）

斬 春雨（立命館大学アジア・日本研究所）

司会 齋藤 希史（東京大学）

Ⅲ―4 大沼枕山詠物詩考（十三時三十五―十三時五十五分）

陳 靈侠（早稲田大学大学院）

司会 詹 満江（杏林大学）

Ⅲ―5 忘れられた漢学者千葉昌胤の文学と生涯（十四時十分―十四時三十五分）

辻井 義輝（東洋大学東洋学研究所）

司会 高山 大毅（東京大学）

発表要旨

第一会場

I—1 二つの武士道論——近代日中兩國の比較から

徐 燕斌（東京大学大学院）

本発表は梁啓超による武士道発見の発想と意図に注目し、日中兩國間の知的連鎖と相違性を見出すことを試みる。

「武士道」という語自体は中国に存在していない。にもかかわらず、梁啓超らの清末知識人は古くから中国に内在して「武士道」が存在したという事実を積極的に説明しようとしていた。それは日本の知識人が武士道を近代社会に応じた解釈で定着させていったのと類似する。当時の人たちは日中兩國それぞれにおいて自分たち固有の武士道があると考えていたが、実はどちらも近代に造られた考え方である。内憂外患の時代にはその時代に適応する思想・精神が生まれる。西洋の衝撃を受けて新たな国民精神を作らざるを得なかった際に、武士道という概念が彼らの視野に入ったのであるが、兩國の対応姿勢によってそこには相違ができていった。

明治武士道を吸収しながら中国独自の武士道を唱えたのは梁啓超である。先行研究で、梁啓超の武士道論は日本滞在時に触れた井上哲次郎らの日本陽明学研究と武士道論に影響されたと言われているが、両者が力点を置くところは違う。その理由は兩國の国家構造が違ったからだと考えられる。従来の研究では梁啓超が中国の歴史上の人物を例としてどのように武士道を説いたかに注目してきた。これに対して本報告では、彼が中国の史実に武士道を求めた根拠とやかに中国思想と結びつけたのかを考察する。そもそも梁啓超の思考における陽明学と武士道との繋がりについてはなお実証的な検討を要する。なぜなら、梁啓超のいう明代中国の「王学」（陽明学）と井上という日本陽明学とは違うものだからである。むしろ彼は、明治日本の影響を受けて「国民之元氣」に固執し、それを一種の国民精神として武士道のようなものと捉えていた。すると「国民之元氣」とはいかなるものか、いつから使われるようになったのかなどの問題が浮上してくる。本発表では以上のような観点から梁啓超の主張を分析してみたい。

1-2 羅近溪における「赤子の心」と本末格物説

黒田 祐介（東洋大学大学院満期退学）

「赤子の心」とは、『孟子』離婁下篇の「大人者、不失其赤子之心者也。」という一節にあらわれる語である。羅近溪（一五一五—一五八八）は、『明儒學案』卷三十四に伝があり、「赤子の心」を重んじ、「万物一体」の哲学を提唱した明代の思想家であるとされる。近溪は『「大学」の宗旨』について問われた際に、先の『孟子』の一節を真つ先に挙げるほど、「赤子の心」を重んじており、「赤子の心」は近溪の「格物」解釈にも大いに関わっていると考えられる。

「格物」は、『大学』八条目のはじめにあたるため、様々な解釈がなされてきたが、羅近溪の「格物」説は、朱子や王陽明の解釈とは全く異なるものである。近溪の「格物」説においては、朱子の説いた「事物の理に究め至る」という解釈は見られない。また陽明の「格其不正以歸於正也」という解釈は、「物」を「意の在る所」とし、「格物」とは、意念發動の際には非の心の發動により正すことができるということであるが、近溪はこれも明確に否定している。「格物」解釈においていくらかの共通点が見られるのは、王心齋（一四八三—一五四〇）の説である。王心齋は、陽明の門人であり、のちに、いわゆる王学左派に分類された。また泰州学派の祖であるともされ、近溪もこの一派に分類されている。王心齋らの「格物」説は、「淮南格物説」、または『大学』経一章の「物有本末」から名を取って「本末格物説」と呼ばれ、先行研究においても、近溪の「格物」説は明末清初期に様々に展開した枠組みとしての「本末格物説」として認識できるとされる。

羅近溪の「格物」説は心齋とも異なる独特なものであるが、本発表では、羅近溪の「格物」説の独自性を確認し、近溪思想を代表的する概念である「孝弟慈」や「赤子の心」がいかに組み込まれているか、またそれが、どのような意義を持つのかといった点について、考察する。

I-3 有司繩尺の差異と統合―『類編歷挙三場文選』『詩義』からみる元代科挙の地域による答案判定基準について

王 瑞 (名古屋大学大学院)

元の延佑元年(一二三二)に一時中断していた科挙が再開した。『元史』選舉志の「考試程式」には、漢人・南人に課す「經義」の科目で、『詩』の解釈は朱熹『詩集伝』を主としつつ、古注疏も兼用するとある。先行研究では、元代科挙において、考官の判定基準と受験者の理解との隔たりに焦点が当てられてきたが、朱子の經典解釈と古注疏の兼用に起因する考官の多様な判定基準の問題については看過されてきた。本発表は、郷試において考官はどのような判定基準によって採点を行っていたのか、各地域によって考官の判定基準に差異はあるのか、ある場合には、その差異はどのようにひとつの基準に統合されていったのかについて科挙資料を用いて明らかにしたい。

『類編歷挙三場文選』(以下『類編歷挙』と略す)は、元の劉貞などが元代科挙の秀逸な答案と考官の批文を抜粋した答案集である。先行研究は『類編歷挙』を史料として、様々な視点から論じたが、答案と批文の内容自体を分析した研究はほとんどない。

本発表では、『類編歷挙』が収録した江浙行省、江西行省、湖広行省で行われた郷試の「詩義」科目の答案と批文を取り上げて、考官の評価と答案に見える朱子の經典解釈と古注疏の用いられ方に着目して、次の二点を検討する。

① 科挙が再開した延佑元年(一二三二) 第一回郷試、及び延佑四年(一二三三) 第二回郷試で、三つの行省において、答案の優劣を判定する基準の地域差の様相。

② 延佑元年(一二三二) 第一回郷試より、天曆二年(一二三三) 第六回郷試まで、湖広行省において、科挙の推進と考官の交代により、答案の優劣を判定する基準が変化した可能性。

これら二つの観点から、元代科挙の地域による答案判定基準の差異と統合を論じる。その上で、朱子の經典解釈の浸透と答案判定基準の変化との関係性を明らかにする。

I-4 明清時代における江南地域女性天文学者の研究―王貞儀を例として

夏 雨 (明海大学)

明清時代の江南地域は、女性文学者を多く輩出した他、他の地域と比べて女性天文学者をも輩出した。清代乾隆年間に活躍した王貞儀はその中の一人である。中国史上における天文学研究者のうち、女性は極めて少なかった。就中、王貞儀は比較的資料が多く残されており、女性天文学者を研究する有力な手がかりである。また、清代では既に西学西洋から入ってきた学問が宣教士等によって中国に伝えられており、王貞儀の研究からは、西洋天文学と中国伝統天文学の衝突や融合も垣間見ることができるといえる。

王貞儀に関する先行研究は量が少ない上、断片的なものが多く、科学者であるという単一の視野から王貞儀の業績を紹介するのみで、当時の社会環境における女性という立場を視野に入れて検討するものはない。また近年、王貞儀はアジアでも、欧米でも、一般人にも多く知られるようになってきており、王貞儀に関する歴史的、思想的な基礎研究は更に需要が増すであろう。本報告では王貞儀の思想が辿った道筋を説明しつつ、先行研究で言及されていない江南地域との連動についても考察を行う。

王貞儀は乾隆三十三年(一七六八)江寧(今の南京)に生まれ、原籍は安徽泗州天長であった。その祖父の王者輔は、王貞儀の幼い頃から彼女に「天算の学」を教えた。彼女は、ひたすら筆を執り続け、大量の著作を残しているが、『徳風亭初集』以外の著述は散逸しており、今日まで伝わらない。家族の影響の他、王貞儀は当時の著名な文人である袁枚や学者の銭大昕とも関わりがあった。また、王貞儀と連絡を取り合っていた。同様に研究を志す女性グループも存在した。本報告では、王貞儀の研究活動は江南地域と繋がりが深いことに加え、明末清初における江南地域にて、閩塾師(先生としての女性)が出現したこと、並びに才女文化との関連性についても検討していきたい。

1-5 元代の養生書と日本的伝播

劉 青（大阪公立大学・東京大学）

古代から、人々が病に對抗し、長寿を求めるために、行っていた健康法は「養生」と呼ばれている。養生とは、現代でいうところの健康の管理、増進、病気の予防、治療、公衆衛生などといった分野を広く含んだ概念である。養生思想とその長生の諸技法は、先秦中国文化の中で発生し、育まれてきたが、とりわけ元代の発展を経て明代において世俗に広く浸透した。社会経済の安定と生活の向上とともに、士大夫階層にとどまらず、庶民の間でも、長寿延命法への関心が高まり、養生ブームが巻き起こった。その間、様々な養生書が刊刻され、朝鮮、日本に伝来し、広く読まれた。

『三元参贊延寿書』は元代の李鵬飛によって著された五巻本の養生書である。天元の寿、地元の寿、人元の寿及び、換元、補薬など道教的な養生術が紹介され、『正統道藏』洞神部に収録されている。日本の養生書『延寿撮要』『延寿類要』『養生記』は本書を参照した痕跡がいくつか見られる。

『山居四要』は元代の汪汝懋によって編纂された養生書である。四巻本で「撰生之要」「養生之要」「衛生之要」「治生之要」で構成されている。本書は元代楊瑀の著作を編纂し、手を加えたものであり、実践しやすい日常的な養生術が全面的に紹介されている。曲直瀬道三が本書の影響を受け、『山居四要抜粹』を著したのである。

本報告は元代養生書『三元参贊延寿書』『山居四要』二書を取り上げ、それぞれの版本、内容及び日本への伝播を分析する。また、新出資料である福井崇蘭館医書は、京都の医家福井氏が所蔵した貴重な医書コレクションであり、医学史研究の新たなアプローチとなる。福井崇蘭館本医書を中心に調査を行い、近世に於ける元代養生書の伝播と受容のさらなる解明を目指したい。

I-6 会盟礼を通して見る春秋・戦国時代宗教観の変化

徐 昊（愛知大学大学院）

礼を中心とする天の祭祀は王権の宗教的特権で、盛大な儀礼は強大な国家権力の表現でもある。会盟で神に誓って盟約を結ぶことは、天子が宗教的な力を用いて諸侯を統制する重要な手段であった。

春秋以前の会盟は天子にのみ許された特権であったが、春秋以降、周の衰退と覇者の出現によって、会盟の中心は天子から覇者に移動した。春秋時代の会盟礼は、三期に分けることができる。前期は覇者が出現する前に諸侯の間に行った私会私盟であり、中期以降、覇者は天子からの許可を得て会盟主宰の中心となった。

会盟は政治的行為である一方で、その有効性は主に神鬼の力によって保障され、その裏返しとして背誓行為への懲罰が想定されていた。しかしこの考えは春秋後期には次第に弱まり、会盟の効力は大きく低下した。

戦国時代になって会盟が衰え、数を減らす中で、宗教による盟呪も大きく軽減した。会盟は神を背景に持つことで社会の信用を強化するが、現実には会盟の守信者が必ずしも神の祝福を受け、違反者に神が罰を与えるわけではない。そこで、会盟に際して現実的な有効性を確保するために、会盟のほかに婚姻関係が加えられたり、諸侯間でも会盟の保障として「人質」の交換、すなわち「交質」が一般化した。

戦国中後期には、諸侯国の数の激減と諸侯国内の専制化により、小国の支配空間は縮小し続け、政治行為としての会盟は次第に衰亡した。

今回の発表では、春秋・戦国時代の会盟礼の分析を通して、天子・覇者・諸侯三者の意識の変化、その背後にある神の権威や、宗教の現実支配力の衰退を浮かび上がらせたい。

東晋(三一八—四一九年)の中期から後期に生きた張湛は、何晏や王弼、あるいは向秀や郭象の説を引用しながら『列子』に注釈を施したことで知られる。張湛の『列子』注では、「無」を万物の根源と考える何晏・王弼の説と、万物に主などないとする向秀・郭象の説の両者を取り込まれており、従来の研究でもこの点については多くの検討がなされてきた。本報告では、まず張湛が王弼や郭象のどの説を活かしてどの説を削ったのかを改めて確認し、張湛がどのように従来の説を総合的に解釈しようとしたのかを検討する。

そして、本報告では、そうした従来の玄学諸説を取り入れた箇所その他に張湛が独自の理論を提出している箇所についても検討を行う。具体的には、張湛は「太虚の域」という概念の導入、および「氣」の理論を用いた「始終論」の解決を『列子』注のなかで行っており、結論的に言えば、これらの理論はどちらも従来の玄学諸説で説明しきれいかなかった箇所を補うものとなっている。つまり、張湛の思想は、従来の玄学諸説のある部分を取り入れ、ある部分は削り、そしてある部分は補填しており、従来の玄学諸説を取りまとめつつそれを理論的に完備させているのである。この点において、張湛は玄学の総合者といえることができる。

しかし、一步引いて張湛の思想の魏晋玄学史上の意義を考えると、必ずしも肯定的な評価だけを与えることはできない。そもそも張湛がそれまでの玄学諸説を総合して補填した背景には仏教の台頭があるが、仏教に対抗するために理論を完備させること 자체가目的化したことにより、玄学が本来持っていた政治思想の側面が希薄化していったのである。これにより、統治者に目を向けられなくなった玄学は、本来の意味で空虚な学問となり、東晋期以降徐々にその地位を落としていったのである。

I—8 『老子義疏』初探—思想構造および成立背景を中心に—

吉岡 佑馬（広島大学大学院）

本発表では、『老子義疏』の思想構造および成立背景の二点を中心に検討を試みる。

『老子義疏』とは、中国国家図書館蔵の敦煌遺書BD14677号である。総序の一部および『老子』第一章より第七章までの疏釈のみの残巻であり、これまで注視されることは少なく、中国側において僅かばかりの研究成果が存在するのみである。その先行研究においては、六朝の義疏形式であること・通行本との異同・仏教思想（唐代華嚴宗）の影響などが、明らかにされているが、体系的にその思想構造の検討を試みたものは管見の及ぶ限り未だ存在しない。しかし、その思想内容を詳細に検討してみると、同時代（六朝・隋唐）の他の『老子』解釈には見られない独自の内容を有しており、同時代の『老子』解釈における、新たな一側面を『老子義疏』より窺えるのではないかと考えている。

『老子義疏』の特色は、仏教教理を用いた経文解釈である。一例として、「体・相・用」を用いた解釈を挙げておきたい。『老子義疏』は第一章冒頭「道可道、非常道」を解するに際し、「道」は「体」、「可道」は「相」、「非常道」は「用」を解するものとして科段分けを行い、各段を疏釈している。この冒頭の一句を「道」の体用を表明するものとして解釈を行う唐代の『老子』注釈は複数存在しており、『老子義疏』もその系譜に連なるものと考えられる。しかし、「体・相・用」の三区分説は他の注釈には見られず、この『老子義疏』の特色と言える。また、「一切凡聖、牝性非染」というような如来蔵思想の影響と思しき、凡から聖への修養も語られており、これも同時代の『老子』解釈との共通性が窺える。

また、成立背景を考えるうえで、いわゆる唐代重玄派において用いられる「妙本」概念の有無や上記、「体・相・用」の援用などを手掛かりとして論じてみたい。

IV—9 諸葛亮の軍事行動と兵法

渡邊 義浩（早稲田大学）

三国蜀漢の丞相である諸葛亮は、『三国志演義』では、神算鬼謀の天才軍師として様々な兵法を駆使していく。それでは、史実の諸葛亮は、どのような兵法に基づいて、南征・北伐を遂行したのであるうか。

『三国志』諸葛亮伝には、陳寿の編纂した『諸葛氏集』の目録が掲げられる。そこには、「兵要第十二、軍令上第二十二、軍令中第二十三、軍令下第二十四」という軍事に関わる篇名がある。また、『隋書』経籍志には、「孫子兵法雜占四卷」に、「梁有諸葛亮兵法五卷」と注記される。後世に編纂された『諸葛亮集』には、諸葛亮の兵法とされるものも収録されるが、類書に引用されるものを除くと、偽作と考えられるものも多い。数少ない真作と想定される篇に表現される諸葛亮の兵法の特徴は、たとえば、同時期に『孫子』に注を付けた曹操の軍事思想に比べて、どのような特徴があるのであるうか。

また、諸葛亮は、南征・北伐と総称される軍事行動を展開したが、そこではどのような兵法が踏まえられているのであるうか。さらに諸葛亮の兵法を代表する「八陣」は、どのようなものなのであるうか。

本報告は、諸葛亮の軍事行動と兵法から、三国時代の軍事について考察するものである。

IV—10 孫呉政治史と赤壁の戦い

佐川 英治（東京大学）

後漢末に孫権と劉備の連合軍は、南下する曹操の軍を長江中流の赤壁で撃退する。三国鼎立の趨勢を決したとされるこの戦いについては、その実相や評価をめぐって、近年においても何徳章と朱紹侯という二人の著名な歴史家によつて議論がなされている。孫呉の勝利は、のちに孫呉の政治宣伝によつて過大に評価されたもので、実際に曹操に与えた影響は小さかつたとする何氏に対して、朱氏は何氏の説を批判し、赤壁の戦いは三国鼎立に決定的な影響を及ぼした戦争であつたとしている。何氏に対する朱氏の批判は首肯できるが、赤壁の戦いは三国それぞれの政治に重大な意味をもつた事件であるだけに、その叙述に対しては史料批判が必要であることも確かである。そもそもつとに呂思勉がいつているように、当時の孫権が置かれていた立場からすれば、あえて彼がこの決戦に挑む必然性は乏しかつたのである。

そこで本報告では、孫権、周瑜、張昭、魯肅の四人を取りあげ、それぞれの赤壁の戦いとのかわりと評価を検討することで、赤壁の戦いが孫呉の政治史にどのような意味をもつたかを明らかにする。赤壁の戦いは、孫権が王朝を立てる以前におこつた事件である。したがつて、このときの危機に対して当時はまだ孫呉政権としてのまとまつた姿勢があつたわけではなかつた。そのなかで赤壁の戦いを主導したのは、長江中流の開発地域の令長と深いつながりをもつていた周瑜であつた。しかし、孫権が王朝を樹立し、魏からの自立を果たすと、逆賊曹操を倒した戦争としての意義が確定し、魏への臣従を主張した張昭の判断は決定的な誤りとされるようになる。そして陳寿の『三国志』においては、劉備と同盟して三国鼎立をもたらしした事件として、その仲介役を果たした魯肅が高く評価されることになるのである。本報告では以上のような赤壁の戦いをめぐる検討を通じて孫呉の政治史に新たな補助線を足すことを試みたい。

IV—11 秦による楚地支配と被征服民

柿沼 陽平（早稲田大学）

王政は天下統一の過程で、楚を滅ぼす。では秦は、征服直後の旧楚民をいかに支配したのか。それ以前からの秦民と同様に扱ったのか否か。そうでないとすれば、具体的にいかなる法律を以て、旧楚民を扱ったのか。近年公開された岳麓書院藏秦簡「秦律令」は、まさに秦帝国が成立する前後の法制資料であり、征服直後の旧楚民の支配の実態をしめす格好の手がかりを提供してくれるものである。なかでも注意すべきは、そこに「新」字が散見し、秦が新しく編入した土地に対する例外規定をさしていることである。戦国楚に独自の法律があったのか、それとも成文法自体が存在しなかったのかについては従来論争があるが、いずれにせよ秦が楚地を征服した時点で、そこに秦律が適用されたのは従来当然視されてきた。問題は、そのときに適用されたのが、故秦（首都咸陽を中心とする秦固有の地域）に対する律令と同じものか否かであり、少なくとも一部の律令が旧楚地にも準用された点が最近指摘されている。ところが「新」字に注目するかぎり、秦律令のなかには旧楚地向けの例外規定があったわけである。これは秦が従来想定されてきた以上に、じつは征服地の実態をふまえた柔軟な法支配を試みていた証拠ではなからうか。本報告ではその実態の一端を解明したい。

IV—12 一世一元と踰年改元—明朝における定制化の経緯について—

小島 毅（東京大学）

三年前の代替わりに際し年号への社会的関心の高まりに呼応して学術的刊行物がいくつか公刊された。たとえば水上雅晴氏が中心になってまとめた『年号と東アジア—改元の思想と文化—』（八木書店、二〇一九年）では中国の事例も対象として改元問題を論じ、同書のなかで鶴成久章氏が「一君一元の沿革について論じている。一世一元が明に始まることは日本でも江戸時代にはすでに意識されており、藤田幽谷『建元論』や中井竹山『草莽危言』がその採用を主張している。報告者はすでに松原正毅編『王権の位相』所載の拙稿「天子と皇帝」（一九九一年）、岩波講座「天皇と王権を考える」の第四巻『宗教と権威』所載の拙稿「天道・革命・隠逸—朱子学的王権をめぐって—」（二〇〇二年）において一世一元制は朱子学の王権論に基づくと論じ、『天皇と儒教思想』（二〇一八年）でもこの私見を述べたが、史料上の実証性の面からなお懐疑的な意見が寄せられている。

今回の報告では思想的考察を抑制し、当時の史料に即して一世一元が実施されていく経緯を整理する。明朝創設当時に一世一元制を採用する旨を布告した文書は史料として現存せず、太祖朱元璋が生涯洪武年号を使い続けたのが意識的な政策なのかたまたまなのかは判断できない。次の建文帝は在位期間こそ短かったが方孝孺を登用して国制整備を試みていた。ただし、靖難の役により彼の統治が否定されたため、この時期の歴史記述は永楽年間に改竄されている。その永楽帝は自分が洪武帝を直接受け継いだことを宣明するため建文年号を抹殺し、洪武年号が三十五年まで続いたことにした。本報告では、当時書かれた文章や後年の記述を史料として用い、最初の年号についての取り扱いを分析する。併せて、一世一元と組み合わせる明朝で定制化された踰年改元を取り上げ、その起源に遡って整理・考察し、これら両者の関係性から王権の時間支配のありかたにおける明朝の特徴を論じてみたい。

第二会場

II-1 字本位理論から見る中国語の主語と話題

内藤 正子 (早稲田大学)

Charles N. Li & Sandra A. Thompson, Subject and Topic: A New Typology of Language, in Charles N. Li ed. Subject and Topic (1976) を代表とする言語類型論の研究成果以来、「話題」、「顕著型」とされる中国語の「話題」に関する研究は大きく進展してきた。「話題」はディスコースにおける既知から未知へ、旧から新へという情報伝達に大きく関わりと注目されてきた中で、文法上の扱いをめぐっては、「語用」のレベル、或いは「句法」のレベルにディスコースにおける機能上の特徴を持ち込んで扱う等の方法が見られる。一方、認知言語学の発達を受けて、「話題」の考察にはプラグマティクスだけでなくコグニティブのアプローチが必要だという主張も見られる。近年英文法における、シンタックスの中で情報伝達の原理を扱おうとする態度は、ディスコースを射程内に入れた文法構築への、「主語」、「顕著型言語」からの一つの試みであると言えよう。

こうした中で字本位理論が提示するのは、形態論とシンタックスの領域や両者の区分にとられない文法研究の為の理論的枠組である。「話題」を語用論の範囲内で解釈することでもない。徐通鏞〈漢語字本位語法導論〉(二〇〇八)によれば、主語―述語と話題―陳述とはそれぞれ大きく異なる枠組であり、基本的に、1. 形合か意合か 2. 定か不定か 3. 閉じるか開くかという違いがある。主語―述語の構造は、文法範疇に基づく一致関係が文を統御し完成する。話題―陳述の枠組にはこのような統御はなく、意味・機能上「定」である話題を文頭に文は生成され、主観的要素が関与する為むしろ開放的に展開する。このような観点を踏まえて、中国語の主語と話題を捉え直してみる。

II-2 西晋碑誌に描かれた女性についての一考察——「晋任城大守夫人孫氏之碑」を中心に——

陳 錦清（京都大学大学院）

「晋任城大守夫人孫氏之碑」（二七二年立碑）は、清代の金石学者葉昌熾に西晋の「三大豊碑」の一つと評価されている。従来、書道史における意義や、碑文の作者については、多くの論考が行われているが、碑主の人物像についての検討はまだなされてこなかった。そこで、本発表は「孫夫人碑」の碑主の人物像、特に「才」の一面について考察を行いたい。

まず、清代の考証学者・金石学者の説を参考に、「孫夫人碑」にある摩滅した部分の復元を試みた。復元した碑文を解釈することで、以下が判明した。碑文の前半は孫夫人の結婚前後の二つの出来事を描いている。それは碑主の結婚前に、父が皇帝からの薦めを断るのに悩んでいた時と、結婚後に父が仕える君主を替えるか否かを躊躇した時、碑主が機智に富んだ助言で父を助けたことである。この二つの出来事を通して、碑主の才覚に溢れた人物像が浮かび上がる。

次に、漢代と西晋期の女性碑誌との比較を視野に入れつつ、「孫夫人碑」に描かれた碑主の「才」の特徴を浮き彫りにした。漢代の女性碑誌では、「四徳」を守る女性の儒教的理想像が描かれている。西晋期に入っても、このような理想像を持つ女性碑誌がある一方、弁舌巧みな「婦言」によって、才能を発揮する「孫夫人碑」も現れた。孫夫人は儒教一辺倒の価値観から脱却しようとする女性であり、彼女の「才」は西晋期の女性に対する価値観の変化を表している。

最後に、なぜほかの西晋の女性碑誌には見られない「才」について、「孫夫人碑」では描かれたのか。その理由の一つとして、「孫夫人碑」の作者の立場・文才を挙げる。また、魏の時代の禁碑令と薄葬の風習の影響が西晋初期にまだ根強く残ったこととの関連も検討したい。

「孫夫人碑」は碑主の人間像を活写し、碑主の生きた証を残す役割を果たしている。西晋期に生きた一人の女性の姿を伝え、女性史の研究においても重要な材料である。

II—3 韋応物の声律と詩体選択について

徐 新源（京都大学大学院）

韋応物（七三五—七九〇）は中唐前期の、詩体上で特徴的な詩人である。彼は古体詩、特に五言古詩を好むことに知られる。しかし、韋応物には律詩と古詩の間にある五言詩が多いため、先人がその詩体を分ける時、統一された基準を持っておらず、その声律的特徴を無視する傾向がある。

先人たちの分岐点は主に律句に対する定義、及び失対や失粘、仄韻に対する許容範囲である。本報告の第一部分はこの四つの視点から、韋応物の五百六十一首の詩の声律を包括的に分析し、五言律詩・五言絶句・七言律詩・七言絶句の順に、全ての律詩と古詩の間にある詩を挙げ、以下の声律的特徴を指摘する。韋応物は五古を多作しただけでなく、句数・押韻・対偶が五言律詩と同じだが、律詩の平仄または粘対法に合わない（非律句・失対・失粘）「声病ある五律」を九十四首作った。これらの詩の声律は様々な規範を打ち破り、詩人の意図的な復古の結果である。また、彼の「声病ある五絶」や仄韻五律、仄韻五絶も唐の人の中で多作である。これらは韋応物の五言詩における復古の実践の一部と見なすことができる。

本報告の第二部分は韋応物の詩体選択とその原因を分析する。同時期の一般的な状況と異なり、韋応物は五言古詩を酬贈詩の普通の詩体と見なすため、彼の酬贈詩は独白詩より多いとしても、五古の圧倒的地位に影響を与えない。さらに、比較的疎遠な人に近体詩を贈り、比較的親密な人に五古を贈る傾向がある。長安から滁州（七七四—七八五春）の十一年間、妻の死と政治的失意を受けた韋応物は、独白詩の主題を拡大し、閑適の風格を確立し、独白詩の創作の頂点を迎えた。大暦十三年（七七八）、鄂縣令となった後は、彼の合律の五律が激減し、声病ある五律が増加した。その原因は酬贈対象の変化及び復古する主張の解放である。

II-4 韓愈「孟東野を送る序」の「鳴」について

鈴木 達明（愛知教育大学）

「孟東野を送る序」は、韓愈の文学論を示す重要な文章として広く認められている。文学批評史においては、その文学論は「不平則鳴」というキーワードで表されることが多いが、近代以降の研究では、もっぱらそのうちの「不平」の方に議論が集中しているように思われる。

しかしながら、近代以前の詩話や筆記においては、むしろまずは「鳴」字に言及することが一般的である。修辞面での興味がその大きな要因ではあるものの、それだけに止まるものではない。本発表では、あらためて「不平則鳴」の「鳴」に注目し、そこに見られる韓愈の文学論と、その発想の由来について考えてみたい。

「孟東野を送る序」の「鳴」の特徴は、通常「物」に用いるべき「鳴」を、聖人も含めた人の言葉までをも指して用いていることにある。韓愈は論理の展開や話題の転換によって、破綻無く全体をまとめ上げてはいるが、従来用例から見ればその特異性は明らかであって、そこには重要な意味が込められていると考えられる。韓愈の他の詩文における用例を参照すると、その意味は、「天によって動かされる」という受動性の強調にあると推測できる。この点について、以下の三つの側面から考察する。

第一に、このような受動性の強調は、同じ韓愈の「劉正夫に答うる書」や「南陽樊紹述墓誌銘」に見える自発性・新奇性の重視、また「造化と功を争う」ものとして文学を捉える姿勢などとはどのように結びつくのか。韓愈の文学論の中での位置づけについて考える。

第二に、発想の由来として、『礼記』楽記に淵源する、文学が外物に感じて発動するという伝統的な文学観や、より広く儒家の天命思想からの影響が想像されるが、私見ではいくつかの点で相違があるように思われる。これについて検討を加える。

第三に、「孟東野を送る序」の「鳴」は、その使用法と発想の両面において、『莊子』との関連性が指摘できる。韓愈の『莊子』受容について考える。

II—5 唐代豪俠小説「車中女子」について——仏教的要素に着目して——

馮 心鶴（京都大学大学院）

『太平広記』巻一九三に引く『原化記』「車中女子」は、「豪俠」部に分類されることから、従来、豪俠小説の代表作、特に女俠に光を当てる作品として読まれてきた。

この小説のあらすじは以下のとおりである。——唐の開元年間、科挙に応じるために上京した受験生（挙人）は、見知らぬ二人の若者によってある屋敷に連れて行かれ、車に乗った十七、八歳の美しい女（車中女子）と出会う。そこでは宴会が催され、車中女子の命じのまま、挙人は壁を歩く芸を披露して、若者たちと軽業を競う。挙人は若者に請われて自分の馬を貸すが、後日、宮中の強盗事件にその馬が関わったことが判明し、挙人は容疑者として投獄されてしまう。そこに車中女子が見事な飛行術を施して現れ、挙人を救出する。故郷に帰った挙人は科挙受験を断念し、再び出仕の念を抱くことはなかった。

主人公の挙人が知らぬ間に謎めいた異能集団と関わりを持つ経緯が詳細に語られ、特に後半部分では、「鳥のように飛び降りる（如鳥飛下）」という具体的な描写をとおして、車中女子の超人的な武芸を生き生きと伝える。

唐代伝奇に登場する豪俠には、確かに軽業などの武芸や盗賊といったイメージを伴うことが多い。しかし、本作における場面設定の語彙や台詞を仔細に考察すると、仏事・仏典を連想させる表現がいくつか用いられるという特徴がある。また挙人が投獄される場面は、仏教の再生譚に見られる常套プロットと共通点を持つことも注目に値する。

本発表では、「車中女子」における用語の考察と類話の比較検討を行ったうえで、「車中女子」に対する新たな読みの提示を試みる。豪俠説話のベールの下に隠された本作の仏教的要素を指摘することによって、唐代伝奇の複雑性の一端を明らかにしたい。

II-6 元雜劇「一折換韻」についての考察

李家橋（早稲田大学大学院）

散曲と雜劇からなる元曲は元代の代表的文学であるが、それまでの韻文文学の主要な形式である詩や詞と比較すると、顯著に異なっている特徴は套曲（套数）、いわゆる組曲の存在であろう。しかも、套曲（散曲では散套、雜劇では劇套と称す）に連ねられた複数の曲が同一の韻を踏むこと、すなわち「一韻到底」はその曲律上の原則だと現在一般的に認識されている。

しかし、遡ってみると、「一韻到底」は、元代の人に論及されたことがなく、明代の後期になってはじめて唱えられ、清朝の劇曲家や近代の日中学者らの祖述を経てようやく定着するようになってきた。果たして「一韻到底」は元代においてどの程度共通に認識され、創作に影響を及ぼしていたのか、「一韻到底」に合致しない例はないのか、その実態を検討するため、本発表者は現存の元の人の手による散套と劇套の作品を精査してみた。その結果として、散套には「一韻到底」に適應せぬものが見られないものの、劇套には「一韻到底」に当てはまらないものが三十三折にも達し、関連した二十八種の作品は現存作品の約六分の一を占めているということが明らかにされた。つまり、雜劇作品においては、一折の套数に属すべきすべての曲が必ずしも同じ韻を踏んでおらず、たまに韻を換える（「一折換韻」）ケースが無視できないほど多数存在している。

一方、先行研究では、元雜劇の「一折換韻」という現象に目を向けるものが非常に少ない。あっても、全面的な調査が行われたことはなく、五、六折のわずかな換韻の例を取り上げ、特例として済ませてしまう傾向が強い。そこで本研究では、この「一韻到底」にそぐわない「一折換韻」という事実を前提として、その換韻の例を全面的に調査し、その背後に潜む元雜劇の演劇実態への関心から、「一折換韻」の諸相を明らかにしたい。

II—7 趙翼の双声疊韻対偶研究とその意義について

汪 洋（九州大学大学院）

双声対・疊韻対は、双声と疊韻の詩語の組合せによって構成される対偶表現であり、空海『文鏡秘府論』東卷に二十九種対の第七「賦体対」、第八「双声対」、第九「疊韻対」として言及されている。空海自身の記述「古人同じく斯の対を出す（古人同出斯対）」からも窺えるように、この形式は唐代の詩人においては基本的な技巧であった。しかし宋代以降、初心者向けの手引きたる詩格と、上層文人向けの詩話とが峻別されると、この双声疊韻対は、瑣末なテクニクとして文人たちに次第に軽蔑されるものになっていった。

さて、清中期詩人趙翼（一七二七～一八一四）はその『陔餘叢考』に、杜詩における双声疊韻の対偶現象を論じ、しかも同じ現象を考証する周春（一七二九～一八一五）『杜詩双声疊韻譜括略』に題辞を送った。同時期、この対偶現象に目を向けた文人に翁方綱（一七三三～一八一八）、洪亮吉（一七四六～一八〇九）などがある。異なる文学観を持ち、早くから文壇において頭角を現わしていた彼らが、一斉にこの問題に着目しはじめたことは、従来の清詩研究では、あまり注意が払われて来なかったように思われる。

本発表では、まず趙翼を考察の中心に、その論説と実例を分析し、彼らが双声疊韻の対偶を再び詩歌技法の中に積極的に取り入れようとしていたことを明らかにする。そして、翁方綱ら同時代の詩論を参照し、彼らの詩歌技巧に対する情熱の淵源を探りたい。思うに、これまでの文学史の概説では、趙翼、翁方綱、洪亮吉の三者は、その文学観は必ずしも一致するものとして論じられてはいない。しかし、時期はやや前後するものの、彼らはともに宮廷に出仕し、希代の好文皇帝乾隆帝及び嘉慶帝の側近としての経歴を持つ。これらの事象が、彼らの文学観の形成に、どのような意義を有したのかを究明し、清代詩歌史研究に関する新たな視点を提出したい。

II-8 張資平の前期小説にみる留日学生と恋愛

喬 亜寧（神戸大学大学院）

近代において日本に來た留学生多くは恋愛の概念の受容にとどまらず、恋愛を実践し、日本人女性と恋に落ちた。しかし、彼らの多くは恋愛の失敗を体験した。こういった恋愛への失望は当時の留学生の創作によく見られる。その中で、張資平の初期創作は異彩を放っている。彼は冷静な筆致で中国人留学生と日本人女性の恋愛様相を克明に描き、理想と現実の間に葛藤する留学生を表現した。

張資平の描いた恋愛像によって、日本での恋愛体験が留学生にどのような示唆を与えたか、また彼らがどのような恋愛認識を抱いたのかについて明らかにする。

本論は留日学生と恋愛という点に焦点を当てて張資平の描く恋愛表象を分析する。具体的には、まず「ヨルダン川の水」、「沖積期化石」、「一班冗員的生活」の中で描かれた恋愛の手段を分析し、留学生がどのように西洋的な形をまねたのかを明らかにする。また、小説における告白の行為に注目し、ラブレターの役割や手紙に使われた言葉の中に隠された意味と恋愛認識について分析を行う。最後に三つのテキストにおける宗教描写を考察し、張資平がキリスト教の要素を用いていかなる恋愛世界を構築したかという問題を検討したい。

本論で取り上げた張資平の三作品は留学生が西洋的な恋愛に憧れ、ラブレター、求愛、同棲などの西洋風の恋愛の手段を模倣する姿を彫り上げたものである。これらの恋愛の道具は恋心を打ち明ける上で重視される価値、理想な関係を相手に伝える役割を持っていた。しかし、張資平の創作に恋愛を成就させた告白はただ現実から逃避する手段であり、愛を滅ぼす危険性を持っていて、ラブレターといった道具以外に、張資平の小説は宗教的な要素を用い、恋愛世界を構築した。具体的に、キリスト教の儀式や天使のモチーフを通じて神聖な恋愛を形作ったが、女性を妊娠させて捨てた罪も表現し、システムの制約から逃れる自由恋愛の危険性を暗示した。総じて言えば、張資平が一九二〇年代初頭に発表した三つの作品は西洋的恋愛の概念、手段を受容したけれども、それに疑いや反省の目を向け、近代的恋愛理想と現実の狭間を深く彫り上げた。

II—9 盧隱の小説「碧波」に描かれた蘇雪林—二人の女性作家の關係性の再考—

龔 月婷（名古屋大学大学院）

盧隱（一八九九—一九三四）と蘇雪林（一八九七—一九九九）は五四時期の代表的な女性作家である。本発表は盧隱の短編小説「碧波」（一九三二）を主な対象として、二作家の關係の再考を目的とする。盧隱は女性解放を唱える女性作家として研究者に注目されている一方、蘇雪林研究は彼女の「反共」と「反魯」「迅」の立場のため九〇年代まで進んでいなかった。一九一九年、二作家は家族の反対にも関わらず、北京女子高等師範学校国文系に入学し、近代文壇で活躍した。一九二一年、蘇雪林は渡仏し、盧隱とは十年程連絡が絶えた。一九三二年の夏、蘇雪林は盧隱の家を訪れ、盧隱との十年ぶりの再会を果たした。「碧波」はこの久々の邂逅に取材していると思われるが、現在それを論じる研究は管見の限り見つからない。

この二作家は作風や文学觀等の面ではほぼ正反対の傾向を示した。奔放で大胆な盧隱に対し、蘇雪林は思想が保守的だと評されてきた。この様に、研究者は常に新か旧か等の対立的基準で二人を捉えており、また相違点や分岐点を強調し彼女たちは疎遠な關係だと解釈する傾向がある。だが、こうした従来の枠組みを問い直し、また二人の關係を再検討する余地があると考ええる。

本発表では、一九一八年から一九三一年までの二作家の軌跡を辿り、二人の接点に注目する。次に、小説「碧波」のヒロイン碧波の描写と蘇雪林、特に上述の再会の状況との関連性を明らかにし、本作は蘇雪林をモデルとし、彼女と作者との再会を基に書かれた小説であることを論証する。又、小説における登場人物のやりとり等の描写及び蘇雪林による回想を手掛かりとし、二作家其々の記述から再会の様子を再現する。尚、本小説の分析を通じて盧隱の蘇雪林に対する態度を推察し、当時の二人の關係を考え直す。以上を踏まえ、異なる道歩んだ二人が互いの境遇への理解を持っており、近代の男性中心的な「知」の下で見過ごされてきた女性作家間の文学上の影響關係を再評価したい。

II—10 黄碧雲の小説における魯迅の受容について——死生観を中心に

高 尚（神戸大学大学院）

本報告は、香港の作家、黄碧雲の小説「江城子」（一九九四）における魯迅の影響、特に魯迅の死生観の影響を分析したい。

「江城子」は、香港の左翼分子の代表人物である呉仲賢と天安門事件の犠牲者を追悼して創作された小説である。この小説は、ヒロインの医師、陳思過が一九八九年に経験した三つの出来事、すなわち患者の遊鬱の死亡、夫の王敬の失踪、娘の惜生の誕生を中心に描かれている。遊鬱は一九歳の学生で、癌を患って間もなく「夏の盛りの正午」に亡くなってしまった。同年、陳思過の夫が行方不明になった直後に惜生という娘が生まれた。しかし、惜生は五歳で原因不明の死を遂げ、陳思過はこのことをきっかけに人生の意味を改めて感じるようになる。

本報告では、黄碧雲が継承した魯迅の死生観について二つの観点から分析する。第一に、命を惜しむことである。魯迅は三一八事件を、黄碧雲は天安門事件を経験し、共に学生の犠牲について書いた。両者とも「犠牲」で現状を変えることはできないため、簡単に命を落とすべきではないと考えていた。第二に、死後の世界についてである。魯迅は、魂や地獄の存在を信じないと断言している。「江城子」の中に出てくる陳思過と遊鬱の地獄についての対話は、明らかに魯迅「祝福」の語り手と祥林嫂との対話の影を帯びている。陳思過も最初、魂や地獄の存在を認めなかったが、大切な患者である遊鬱の死をきっかけに、幽霊を見るようになり、地獄の存在を信じるようになる。このような変化は、作者の現実への幻滅、ひいては唯物論への疑いと関係があると考えられる。

本報告では、黄碧雲が受容し、継承した魯迅の死生観が作品の中でどのように発展してきたかを説明する。

第三会場

IV—1 歴史物語の形成—劉向『列女伝』巻七 孽嬖伝「周幽褒姒」を中心に

仙石 知子（二松学舎大学）

中国史で理想とされる夏・殷・周の三代は、末喜・妲己・褒姒という三人の悪女により滅んだ、と劉向の『列女伝』は記す。しかし、司馬遷の『史記』では、夏本紀には末喜の記述はなく、外戚傳に「桀の放たるるや末喜を以てす」という簡単な記述があるに過ぎない。『国語』もまた、末喜の詳細を記すことはない。末喜についての詳細が『列女伝』という子書だけに記されるのは、史書は歴史事実を記さないことによるのであろうか。

一方、『列女伝』と『史記』に詳細に記される褒姒の姿は、西周の現実をある程度反映する『詩経』では、両書で知られる「笑わぬ女」ではない。歴史事実と歴史書・歴史物語の記述との相違について、出土資料を含めた古典文献から、それを考えていくことは確かに難しい。それでは、歴史の真の姿に迫ることは、不可能なのであろうか。

本報告では、『詩経』の多弁な女性としての褒姒の姿が、『史記』と『列女伝』には継承されず、両書の「笑わぬ女」として記述が、『春秋左氏伝』を起源とすることを明らかにする。そのうえで、『史記』と『列女伝』の記述を比較することにより、何が物語に加えられていったのかを説明することで、歴史物語の編纂意図を探ると共に、史実に近づくことを試みる。そうした史料批判を用いれば、文学・哲学の資料であっても、歴史を構築していく材料にできる。正しい事実のみを記すわけではない中国の資料から歴史を構築する際には、文学・哲学などの分野を超えた綿密な文献の分析が必要なのである。

IV-2 『春秋左氏伝』の素材―「君主の称謂」を手がかりとして―

水野 卓（愛媛大学）

『春秋左氏伝』（『左伝』）の史料性格については、「春秋学」の一環としての経学的な視点をはじめとして様々な分析が試みられてきた。歴史学の視点としては、『左伝』の史料の有用性を探るべく、その素材（原資料）や編者など成立過程を歴史的背景とともに検討がなされてきた。特に、素材の部分に関しては、『左伝』以前に「原本左氏書」（顧頡剛）や「古文左氏（伝）」（小倉芳彦）といった書物が考えられ、さらにその源流として「列国史」などの存在が想定されている。

そのため、『左伝』を国別に編集し直した研究も数多く世に出されてきたが、それらを見ると、『左伝』の記事をある国に分属させる場合、基本的に主題となる国（『主題国』）が基準となっている。しかし、「列国史」というある国で編纂された歴史書を想定するならば、『主題国』ではなく、記録された国の方に着目すべきではなからうか。

そこで本発表では、『左伝』の記事について、それがどの国で記録された歴史書（『列国史』）であるかを推定する。その際に、注目するのは「君主の称謂」である。魯の年代記がもたっていると言われる『春秋』の「君主の称謂」を見ると、例えば、その事件が起きた時点で在位していた魯の君主は「公」と記され、魯君と同時期に在位していた他国の君主は「国号＋爵号」（例・斉侯）と記される。これを『左伝』に援用するならば、「公」という「君主の称謂」が見られる記事は、その称謂が指す君主が治める国の記録であり、「国号」が見られる記事は、その「国号」以外の国で記録されたと推測できる。

しかも、この「君主の称謂」に注目すると、それが当時の同時代記録かどうかもある程度推測可能となる。これまで『左伝』の史料的な分析で注目されてきた『編纂』時の状況ではなく、その『素材』の記録された国や時期を明らかにすることは、春秋史研究における『左伝』の史料的価値にも関わる大きな問題であると言える。

IV—3 後漢章帝の統治と宗室・外戚

渡邊 将智（就実大学）

従来の後漢政治史研究では、後漢第四代の和帝の治世以降に外戚が「輔政」を委ねられて専権を振るい皇帝権力の弱体化を招いたとし、その背景を、外戚が皇太后による臨朝称制に依拠して国政に参与した点に求めてきた。これは皇太后が幼少の皇帝を後見して臨朝したことを、外戚の権力の淵源として重視する見方である。しかし、外戚は先代の皇帝の在世中より任用される場合があった。そうであれば、外戚が国政に参与する契機は、すでに先代の皇帝によつて用意されたものではなからうか。

こうした観点に立つ時に注目されるのが、和帝の先代にあたる第三代の章帝である。第二代の明帝の治世には、楚王劉英の謀反に代表されるように、宗室がたびたび不穏な動きを見せ、その状況が章帝期にも続いた。このようななかで、章帝は帝位継承後に統治の安定をどのようにして図ったのだろうか。

先学の多くは、初代の光武帝と明帝が外戚を抑制して国政に参与させなかったのに対して、章帝が宗室・外戚に対して融和的な姿勢を示したとし、その背景に儒家の影響などを想定してきた。しかし、帝位継承当初、章帝は宗室・外戚に対して常に融和的に接していたわけではなく、硬軟両様の姿勢で臨んでいたとみられる。そこで、章帝と宗室・外戚の関係について、三者を取り巻く政治状況の変化に目を向けつつ再検討する必要がある。

本発表では、章帝が統治するにあたり、明帝期以来の宗室をめぐる問題にどのように対処し、また外戚を如何に用いたのかを検討する。さらに、章帝が自らの統治を和帝にどのような形で受け継ごうとしたのかを検証する。本発表において章帝による統治の内容を検討することを通じて、和帝期以降に外戚が国政に参与するに至った政治的背景を明らかにする。

IV—4 後漢〜六朝における処士

長谷川 隆一（早稲田大学）

処士とは何者か。一言でいえば、南宋の洪适が「吏に非ず民に非ざれば、則ち処士と曰ふ」というように、官吏でもなく民でもない存在と言える。いくつかの先学は、処士のこのような最低限の定義に多くのラベリングを重ねてきた。たとえば、鎌田重雄氏は、処士を儒家的学問と儒家的徳行の所有者で、官に就かない人とする（「後漢の処士」）。川勝義雄氏は、処士を後漢〜魏晋へという時代転換におけるレジスタンスの一員、豪族の自己矛盾を乗り越え、「民の望」として濁流と鋭く対立する清流の一員として位置づけた。これにより、いまなお支配的な見解となっている川勝氏の清流・濁流論の中でレジスタンス運動の一員に位置づけられた処士は、一挙に時代の主役級に躍り出ることとなった（『六朝貴族制社会の研究』）。さらに、処士に関する深い考究を行った都築晶子氏は、伝世文献だけでなく、碑刻資料に見える処士を取り上げ、鎌田氏の研究を踏まえつつ、処士を地域社会の人々の共感・支持を得、当該地域の人的諸関係を取り結ぶ媒体となり、統合者となったとする（「後漢後半期の処士に関する一考察」）。

上記した研究は、それぞれに重要な考察がなされているが、一つ共通の問題を有している。それは、処士の最低限の定義はあくまで官吏でもなく民でもない存在であるにも関わらず、研究者の側が多く有意義づけを与えてしまうと、処士がとりわけ重要な存在のようにみえてしまう、ということである。そこで本報告では、まず伝世文献・碑刻資料に見える処士について見、先行研究により作られた処士像を解体した上で、そしてそのような処士像が、後漢〜六朝期にかけてどのように生産されていったのかについて、検討することとしたい。

IV—5 南宋における孫呉政權論をめぐる一考察

田中 靖彦（実践女子大学）

南宋における三國時代をめぐる評価については、「北宋の曹魏正統論が南宋において蜀漢正統論へ転換した」という切り口から論ぜられる傾向にある。斯かる論が主流を占めた大きな要因としては、やはり『四庫全書總目』史部一・正史類一『三國志』の論の影響力が大きいであろう。この論を代表として、三國時代をめぐる歴代の議論は、蜀漢と曹魏による二極対立という構図によって語られてきたという印象を持たれることが多い。そしてこのことは、孫呉に関する言説の展開については注目されることが少なかった、ということをも物語っている。それでは、孫呉政權をめぐる歴代の議論は果たして等閑に付されるべき内容のものであったのであろうか。

先に挙げた『四庫全書總目』では、東晉の習鑿齒や南宋諸儒が蜀漢に肯定的であった理由を、東晉や南宋の境遇が蜀漢に近いことに求めている。この説が強い妥当性を有することは確かであるが、その一方で、南宋の置かれていた地理的境遇は、蜀漢よりもむしろ孫呉に近いというべきであり、それでは「なぜ南宋において孫呉正統論は起らなかったのか」という点は疑問として残るであろう。斯かる観点を以て南宋の人々の言説を見てみると、孫呉に関する言説は決して少なくないことに気づく。確かに南宋では、曹魏や蜀漢に対する論と比べれば、孫呉を対象とした論は多くはなかったように思われるし、論ぜられたとしてもそれは批判的な論旨である場合もある。だが当時においては、孫呉政權およびその人士に対する肯定的な論や客観的な評価も見受けられるのであり、決して南宋代において孫呉が等閑視されていたわけではない。

本発表では斯かる点に着目し、南宋の人々が抱いていた歴史観を探る一つの材料として、南宋代における孫呉を中心とした六朝評価について検討するものである。

IV—6 孫盛の史学の検討—裴松之の先駆として—

袴田 郁一（早稲田大学大学院）

魏晋から六朝期は史学史上の画期と見なされる。そのなかでもとりわけて、六朝を代表する史注、裴松之『三国志注』は高く評価されてきた。その史注のうちに『三国志』本文や他の史書に対する史料批判が散見され、かつそこに近代歴史学に通ずる科学性・客観性を見出されたためである。従前の中国史学史研究はしばしば、近代ヨーロッパ歴史学に匹敵する精神・方法論の発見を課題として掲げてきた。それゆえ裴松之の史学とその手法は、あるいは中国史学史上のメルクマールと位置付けられもされる。

『三国志注』には史料批判が含まれる。だがそれは近代歴史学のような学問としての科学性の担保を目的としたものではない。また、史料批判の初例は裴松之ではなく、現在に伝わる限りでも東晋の孫盛らがある。孫盛は、『魏氏春秋』、『晋陽秋』、『蜀世譜』など多数の史書を著したほか、史料批判の先駆である『異同評』がある。『三国志注』はこれら孫盛の史書・史論・史料批判を多く引用し、そしてしばしば批判を加えている。このことから裴松之は、その方法論の少なからざる部分で孫盛からの影響を受けていた可能性がある。

近代歴史学的な関心から離れ、いかにして六朝史学の手法が醸成されたか、六朝史学が史学史としていかに展開したかを考察するためには、裴松之のみならず、それに先駆ける孫盛ら東晋期の史学の検討が必要であると考える。本発表は、孫盛の史料批判や史論を中心として、裴松之と比較することを通して、その先駆としての史学の在り様と思想的背景を検討するものである。

IV—7 李楷の遺民論について

顧 嘉晨（東京大学大学院）

従来の明末清初の遺民研究では、専らいわゆる南方（漢）人、特に江南地方の知識人の視点から明の「遺民」として捉え、彼らの思想を考察することに傾きがちであった。一方で、それに比して北方（漢）人を着眼点とした研究はやや少ない。五胡十六国や金元のように、異民族の侵入によって、中華の北方領土いわゆる中原地方が奪われるということは歴史上何度も繰り返された。中華政権の南方偏安という状況が長期化したことにより、失った北方領土の回復とそれによって北方人を解放することは実現不可能であるとみなされる傾向が顕在化した。その結果として、異民族占領下の北方人たちが、そのまま南方に偏安した母国に遺てられ、事実上いち早く「遺民」となってしまった。同様に、流賊の反乱、北京の陥落、清と南明の南北分断などに臨んだ明末清初の北方人も間違いなく、数回の「国変」、「遺棄」から生き抜き、より複雑な遺民感情を抱いたという点を決して看過することはできない。むしろ、「北」という新たな切り口から、明末清初の遺民史を再検討すべき余地があると言えるであろう。

本発表では、明末清初に江南に寄寓した北方人の一人である陝西出身の李楷（一六〇三—一六七〇）の事例分析を通じて、ある北方人が考えた「遺民」の概念を説明することを試みる。具体的には、「宋遺民広録序」をはじめ、彼が書いた「文山祠」、「長安」、「甲申紀序」などの作品及び同時代の錢謙益からの評価などを用いて、北方人ならではの視点から、まず李楷自身にとつての「遺民」という概念の定義、そして明末清初と類似する宋金元時代における「南宋遺民」の意味、さらに南方へ偏安した政権などに対して如何に考えたのか、すなわち李楷の遺民論について考察を行う。それに伴い、李楷から見た明末清初の実像、また李楷が一時的に清に仕え、結局晩年に故郷の陝西に帰った理由などについても可能な限り探究に努めたい。

IV—8 儒教史観と神国思想の相克——室町時代の「呉太伯後裔説」論争について

陳 路（関西大学大学院）

呉太伯後裔説とは日本人の先祖を『論語』泰伯篇に出る呉の太伯（泰伯）と想定する説である。この説が記される『三国志』『晋書』は奈良時代の頃いち早く日本に伝来したものの、日本人の関心が惹かれることほとんどなかった。このような状況が変わるのは室町時代であった。

室町初期の五山禅僧中巖円月が編纂した「日本紀」という史書の中に、神世七代の最初の神、「国之常立神」の先祖は呉太白であると想定する記述があったらしい。この説はただちに物議を醸し、「日本紀」も朝議により封殺された。しかし、それにもかかわらず中巖の「呉太伯後裔説」は依然として大きな影響力を残し、北畠親房や一条兼良など当代随一の学者の批判を招いた。

しかし、このように大きな物議を醸した「呉太伯後裔説」は歴史的一事象として認識されることはあっても、その内実が深く追究されることはなかったようである。特に論争の裏に隠れる観念的衝突はほとんど考察されてこなかったように思われる。

王朝の先祖を儒教の中に徳を極めた人物と想定する説は『漢書』にも見える。『漢書』は儒教的歴史観をもとに、王朝の先祖は儒教的聖人と想定するによって漢王朝の正統性を構築した。つまり、中巖の「呉太伯後裔説」は儒教的歴史観より日本の国史を再解釈するものであろう。しかし、室町時代において、儒教的歴史観より日本の国史を再解釈するのは中巖だけではない。「呉太伯後裔説」を批判した親房と兼良も儒教的歴史観をもとに日本の国史を再解釈する史論書を著述した。しかし、なぜ同じ儒教的歴史観をもとにしつつも、親房と兼良は「呉太伯後裔説」を批判したのであろうか。その要因の一つは合理主義的な儒教歴史観と神の絶対的権威を求める神国思想の間の相剋にあると考えられる。

Ⅲ—1 古代日本漢文学における音声と書記の往還——〈訓読〉の美と文字化について——

具 惠珠（国文学研究資料館）

本発表は、古代日本において書記言語の漢文の導入とともにその読解の方法として生成された訓読が、古代日本漢詩文の詠作といかに連関していたのかを、具体的な用例に即して分析することを目的とする。

訓読は、漢文テキストを日本語の構文に変換して読む方法であるにとどまらず、日本語の構文を基に、より容易に漢文テキストを書く手段としても有効であった。訓読を介した漢文の読み書きは、正格の漢文には見られない用字・語彙・語法など、日本語の要素を含んだ書記形態を派生させ、それについては、和習や変体漢文といった枠組みで研究が進められてきた。

ところが、律令国家の正統的な文芸たる漢詩文を享受する音声言語であった訓読から、日常言語とは異なる語調を伴った独特の美感が見出されていたことが、日本の詩文詠作や書記形態にいかなる影響を及ぼしたのかについては、従来、古代日本漢文学研究の分野で十分に議論されてこなかった。

本発表は以上を踏まえ、和習の有無を問わず訓読の美感を意識した書記を、日本語の音声の文字化という位相で捉え、古代日本における詩文詠作のあり方を照射する。奈良朝から院政期までの作品のうち、対句を中心に美的側面が重んじられたジャンル、とりわけ公共の場で読み上げられ、音声で享受される対象となったもの（詩・賦・序・願文など）に焦点を絞って、和文のテキストをも参照しながら用例を検討し、訓読がいかなる美的指向を促したのかを考える。

Ⅲ—2 景徐周麟の作品における「黍離の嘆き」について

武 穎（名古屋大学大学院）

五山文学後期の作家景徐周麟は詠史詩に長じ、その作品には、「黍離の嘆き」と呼べる類の詩群があり、その文学的特徴や歴史観を考察するのに格好の素材である。

文明十五年（一四八三）の作「読黍離詩」（『翰林葫蘆集』第三卷）「三百五篇刪詩後、視今如古黍離離、春秋天下分成七、故殿殘基雨一犁」があり、『詩経』王風「黍離」篇に基づいた感慨を詠む。「黍離の嘆き」を主題とする詩は、繁榮していた都城、宮室が廢れ、人跡が稀になって黍や野草などの植物が生え茂っている光景を描写し、榮枯と盛衰の対照によって世間の移り変わりを嘆き、作品によっては王者や統治者を戒める意図を込める。

景徐周麟の作品には、「離離」によって象徴される「黍」のほか、中唐の劉禹錫が十四年にわたる貶謫生活から京師に戻った際に詠んだ詩における「兔葵燕麦」の表現、さらに唐末の呉融による「秋色」詩における「曾從建業城邊處、蔓草寒烟鎖六朝」句における「蔓草」、「寒烟」などの詩語を愛用している。これらの詩語と対照となつてゐる表現には、繁榮を表す「桃花」、「隋柳堤」などが挙げられる。そのうち、文明九年（一四七七）詩会における作品の「賦桃花送客」、文明十年（一四七八）自舎の茶会作品「桃花茶」などのほか、文明十五年（一四八三）の「玉樹後庭花」（第三卷）と明応六年（一四九七）「建鄴秋色」（第四卷）、「金谷二十四友図」（第四卷）などの詩群は比較的個性があるもので、作者の故事、典故の受容と独自の発想が見られる。なお、文明十五年（一四八三）の作品「蔓草寒烟九條道中」（第三卷）も当時の京都の現実をありありと描いた作品である。

以上の作品の成立年代は、凡そ文明年間（文明九年から十五年）と明応年間（特に明応六年）に分けられる。文明九年末に応仁の乱が一旦収束したが、明応二年（一四九三）に明応の政変が発生し、京都においては引き続き動乱が起こり、景徐周麟は、当時経験した動乱の現状を「黍離の嘆き」に託したのである。

Ⅲ—3 經學者佐藤一斎の填詞—新見六首をめぐって

新 春雨（立命館大学アジア・日本研究所）

佐藤一斎（一七七二—一八五九）は江戸後期の儒學者であり、「兼取朱王」、「固い經學者」として世に広く知られている。そのため、一斎の朱子學と陽明學思想に力点を置いた研究が多数あるが、一斎の文學作品への関心は薄い。筆者は一斎の詩集を調査する際、『愛日樓全集』と『一斎浄稿』の中に填詞六首を発見した。そこで、本発表では、新見六首の詞を主たる研究対象とし、その具体的な所収状況と一斎の填詞経緯について考察する。

現在、都立中央図書館河田文庫蔵本、国会図書館蔵本、静嘉堂文庫蔵本の三種の精抄本が存在する。荻生茂博氏「『愛日樓全集』解説・解題」（『愛日樓全集』、ぺりかん社、一九九三年）と大垣朝氏「解題」（『佐藤一斎全集第二卷 詩文類』上、明德出版社、一九九一年）により、『愛日樓全集』は『愛日樓稿本』（河田文庫、特別買上文庫蔵）を編次し増訂したものである。詳しく調査すると、稿本「一斎居士稿」所収の「一斎居士戊辰稿」と「一斎居士己巳稿」の二稿に詞が収録されており、一斎の填詞時期は文化五年（一八〇八）より以前だと推測できる。次に、『愛日樓全集』と別系統の稿本、国会図書館所蔵の『一斎浄稿』にも同作品が収録されている。『一斎浄稿』の成立は一斎本人と林述齋、松崎慊堂、三谷慎齋との協議を経たものであるため、詞六首も四人協議の結果だと思われる。

最後に一斎の填詞経緯について考察した。一つには諸生の必讀書目としての『初学課業次第』に『詞学全書』が列挙されており、一斎自身が填詞に関心を持っていたことが窺える。二つには一斎の填詞は清・吳綺の『林蕙堂全集』を参考にした可能性が高いことが挙げられる。三つには一斎は林家一門の填詞及び当時の填詞風潮に影響され、試作六首を作ったことである。

「固い經學者」と称されている一斎に填詞作品が存在することは非常に興味深く、また一斎の学問や思想等を全面的に理解するには、文學も不可欠な一節であると思われる。

Ⅲ―4 大沼枕山詠物詩考

陳 靈侠（早稲田大学大学院）

大沼枕山（一八一八―九一）は江戸後期から明治前期にかけ、日本漢詩壇に重きをなした一人である。化政期の詩壇を席卷した江湖詩社の重鎮菊池五山に師事し、若くして頭角を現し、二十一歳の時、早くも第一詩集の『房山集』を上梓し、二十三歳の時には『詠物詩』を世に問い、詩壇の寵児となっている。彼が生涯作った詠物詩は四百余首に上り、詠物詩が流行した江戸後期にあってもその数は突出して多い。江戸後期から明治初期にかけ折々に編まれた選集にもほぼ例外なく彼の詠物詩は採られている。また、清末・愈樾の選『東瀛詩選』（四十卷、補遺四卷、明治十六年刊）には、彼の詩が八十六首採られ、そのうちおよそ四分の一に当たる二十二首が詠物詩であった。以上の事実は大沼枕山の詠物詩が質量ともに抜きん出ており、彼の詩業における重要性が如何に大きかったのかを雄弁に物語る。

近年、彼の詠史詩の訳注および研究の専著が石川忠久氏と門生の手で出版された（『大沼枕山『歴代詠史百律』の研究』汲古書院、二〇二〇年二月）が、彼の真骨頂とも言うべき詠物詩をもっぱら対象とした研究は、管見の限り極めて少ない。そこで、本発表では、同時代的に高く評価された彼の詠物詩に如何なる特徴があるのかを幾つかの観点から析出し、空前の漢詩創作熱が現出した江戸後期における詠物ブームの実態とその中で枕山の詠物詩が体现する技巧的高みについて分析する。さらに、幕末維新期に詠物が退潮し、枕山の詠物詩にも変化が生じたことの意味を明らかにする。私見では、枕山の詠物詩は、江戸後期の詩壇の盛況と水準をもっともよく象徴すると同時に、幕末維新期の変容をもっとも明るく映し出す鏡でもある。

Ⅲ—5 忘れられた漢学者千葉昌胤の文学と生涯

辻井 義輝（東洋大学東洋学研究所）

千葉県をその漢学活動を基準に区分けした場合、上総・下総西部、上総・下総東部、東葛、安房の四区域に分けることができる。発表者は、このうちあまり調査研究の進展していない上総・下総西部（旧千葉県・旧君津郡・旧市原郡）において、漢文資料の調査研究を行っている。

この過程で、千葉県において明治大正期の地方紙に掲載された漢詩文を包括的に調査した際、『東海新報』紙上に、「鹿峰千葉昌胤」なる人物の名を散見した。しかも、その漢詩文を見ると、非常に優れた筆力を有し、同紙上では川北梅山からもその力量が絶賛されていることが窺えた。この鹿峰千葉昌胤なる人物については、その後、旧市原郡八幡村の飯香岡八幡宮社家（祝子職）山下賢治の三男・山下亀吉が旧今富村の千葉禎太郎の養子となり、改名した名であったことを解明した（『江戸風雅』第二十五号）が、さらに、その伝記的事実を調査してみると、明治四十二年刊の『房総人名辞書』に、二松学舎で三島中洲に師事し、同塾で幹事、教授についた後、明治二十七年、朝鮮に渡り、官制の起案、文書の翻訳に従事した後、宮内府奎章閣の嘱託として、皇室の図書の整理に従事したとあり、「其の漢学に於ては夙に出藍の誉れあり」、「其漢文家たる盛名は蔚然として同国儒生紳士の間に嘖々たりと絶賛されていることを認められた。

そこで、この千葉昌胤（山下亀吉）の記した詩文を収集した所、現在の所、「陪游録」、「正風俗策・上」、「玄武石記」、「東海新報」「雑録」「文苑」所載の詩文、「夢笑盧記」、「題大国民朝鮮号」といった漢詩文が集まった。それぞれ、自然の光景を美しく詠んだものだったり、時勢や人間の生命をユーモラスで独特な視点で批判したものだったり、火山噴火の際に起きた惨事を生々しく描写したものであったりと大変バリエーティに富んでいる。本発表は、このような忘れられた漢学者千葉昌胤（山下亀吉）の文学と生涯を紹介するものである。

パネルディスカッション（書評シンポジウム）

【趣旨説明】本シンポジウムは学会企画として実施される新たなプログラムであり、本学会会則第3条（事業）第4項所掲の条文「会員の研究に対する援助」をその目的とするものです。主たる「援助」の対象は、本会のいわゆる若手会員です。ただし若手会員の研究支援に関して言うならば、すでに本会は、二〇一一年三月に「第一回若手シンポジウム」を開催し、そしてそれを発展的に引き継ぐかたちで「次世代シンポジウム」を実施しているわけであり、目的を同じくする企画をなぜ別立てで実施するのかと訝る向きもおられることでしょう。たしかに本企画は、若手支援に関する年来の精神を分け持つものです。とはいえそれとともに、書評活動の活性化という目的をあわせて掲げることにより、若手を含む会員相互の学術交流の場の創成をも目指しています。本シンポジウムを「次世代シンポジウム」から独立したかたちで挙げる理由は、まさしくこの点に存するのですが、こうした試みのより良い形態に関しては、今後、会員各位のご意見をうかがいながら作り上げてゆきたいと思っています。

本シンポジウムはパネルディスカッションの形式で行われます。一点の学術書に対する三名程度の評者と当該の著者および司会者を合わせてパネルを組むこととして、大会参加のパネルを公募するとともに、企画者の側でも二組のパネルを準備しました。本大会では三組のパネルによる書評会を実施します。その概要は次頁以降に掲載しました。

今回策定したパネルの条件は下記のとおりです。学会による活動として本企画の公平性をいかに確保するか、そもそも書評シンポジウムをどのようにして若手支援に繋げるか、といった点を考慮して定めたものです。実施要領等の詳細に関しては『日本中国学会便り』二〇二二年第一号をご覧ください。みなさまの積極的なご参加をお待ち申し上げます。

- 一、パネリストのうち、著者と司会者、および評者二名は本学会の会員資格を有していること。
- 二、書評の対象とする著作は、著者にとってデビュー作に相当する学術書で、二〇一八年～二〇二〇年に刊行されたもの。評者の年齢は、原則として、当該学術書の著者と同年齢もしくはそれ以下。
- 三、専門領域・所属機関・性別などについて、多様性が考慮されたパネルを歓迎する。

以上

パネルⅠ・福谷 彬著『南宋道学の展開』（京都大学学術出版会、二〇一九年三月刊行、本文三五七頁）

宋代に発展した儒教の一派「道学」は、しばしば「程朱学」という言葉と同一視される。「程朱学」という呼称は、北宋期の程顥・程頤兄弟（二程）と南宋期の朱熹の思想を一体と見なす見方を前提としている。しかし、「道学」≡「程朱学」と理解してしまうと歴史の経緯から言えば正しくない。南宋期には朱熹や、時には二程の思想をも批判する様々な思想家が「道学」と称せられたからである。本書は、これまでのように朱熹を道学の思想的発展の頂点とすることを自明とせず、朱熹を含む様々な学派を総体として「道学」と理解することを試みた。その上で以下の点に注意して考察を加えた。

①胡宏や陳亮、陸九淵といった以下の点に注意して考察を加えた点。

②従来のように古典注釈や形而上学を単独に論ずるだけでなく、道学者の政治上の活動にも十分注意して、古典注釈・形而上学が彼らの政治的な活動にどのようにつながっていたかを明らかにしようとした点。

本書の考察を通じて、朱熹や陸九淵や陳亮といった当時の道学者は、孝宗末年の道学と反道学の党争時期に、政治的に連帯する側面があったが、反対派にどのように対抗するかという点で方針の相違があり、その方針の相違は彼らの思想上の隔たりを背景としていることを明らかにした。

パネリスト

評者・岩本真利絵（釧路公立大学。明代政治史、嘉靖〜万暦年間の皇帝と士大夫の思考から）

早川 太基（神戸大学。唐宋詩学を中心とした琴棋書画などの文人文化の研究）

陳 佑真（帝京大学。三蘇蜀学の経書解釈を中心とした宋代思想史）

著者・福谷 彬（京都大学）

司会・三浦 秀一（東北大学）

パネルⅡ・福田 素子著『債鬼転生―討債鬼故事に見る中国の親と子―』（知泉書館、二〇一九年一〇月刊行、本文二九七頁）

討債鬼故事とは、中国に現在まで伝わる怪談の一つであり、金を追われ、又は借金を踏み倒された者が、死後加害者の子に転生して、取り立てるべき額だけ親の金を蕩尽するという話である。本書はこの討債鬼故事という一つの話型について、その萌芽から成立、変容に到るまでを通時的・広域的に、分野を超えて追求し、更に宗教思想的な背景を追究したものである。

第一部では、インドの生命観である輪廻が中国において、本来相容れない復讐という行為と融合し、討債鬼故事の成立に繋がった過程を論じた。第二部では、仏教や道教の儀礼において鎮撫の対象となる孤魂野鬼の一種である「冤家債主」の概念が、復讐譚としての討債鬼故事にもたらした変化を論じた。冤家債主像の変化につれて、討債鬼も怨恨という要素を失い、運命の不条理に苦しむ親の心を慰撫する話となった。第三部では、日本における討債鬼故事の受容を考えた。日本では背景となる家族制度と経済制度が中国とは異なっていたため、転生の動機や借金の意味が中国とは全く違うものになったのである。補論として、討債鬼故事の誕生と伝播に大きな働きがあり、本文中でも取り上げた偽経『仏頂心陀羅尼経』の成立と信仰形態に関する考察を加えた。

パネリスト

評者・宇野 瑞木（専修大学。東アジアの説話文学、特に孝子説話とその図像の研究）

千賀 由佳（龍谷大学。明清白話小説中の仏教・民間信仰）

吉田 勉（北海道教育大学釧路校。中国思想史・経書解釈学史）

著者・福田 素子（聖学院大学非常勤講師）

司会・佐野 誠子（名古屋大学）

パネルⅢ・田村 容子著『男旦』(おんながた)とモダンガール―二〇世紀中国における京劇の現代化―

(中国文庫、二〇一九年三月刊行、本文三五二頁)

男が女役を演じる「おんながた」、これを中国語で「男旦(ナンタン)」と呼ぶ。中国の伝統劇、といっても一八世紀末から一九世紀にかけて萌芽した、比較的歴史の浅い京劇は、かつては男性ばかりで演じられた。二〇世紀に入ると、女優の登場、劇評の発達、近代劇の流入など、さまざまな変化が京劇界に影響を与える。とくに、女役を演じる俳優の身体が、男性から女性に交代したことは、京劇の設備と内容の両面にわたる革新と同時に進行し、それぞれと深く関わっていた。本書は、新聞・雑誌に掲載された上演にまつわる記録から、「男旦」の興亡史を手がかりとして、二〇世紀の京劇がたどった現代化の道のりを論じたものである。第五十二回日本演劇学会河竹賞奨励賞受賞。

〈目次紹介〉

- 序章 男旦はモダンガールをめざす／第一章 清末民初の女芝居／第二章 港からきた女優／第三章 劇評家・辻聴花と女芝居
第四章 「鴛鴦蝴蝶派」と上海の遊戯場／第五章 機械仕掛けの舞台／第六章 日本人の描いた京劇
第七章 「孤島」期上海と戦時下の演劇／第八章 たたかう女性像の系譜／終章 男旦とモダンガール

パネリスト

評者：菅原 慶乃 (関西大学。中国語圏映画史)

松浦 智子 (神奈川大学。中国古典通俗文芸)

宮内 肇 (立命館大学。中国近代史)

著者：田村 容子 (北海道大学)

司会：鈴木 将久 (東京大学)

パネルディスカッション（次世代シンポジウム）

日本漢学を／で考える

司会・コメンテーター…長尾 直茂（上智大学）

高山 大毅（東京大学）

報告者…韓 淑婷（関西大学）

宋 晗（フェリス学院大学）

水上 雅晴（中央大学）

日本漢文部会は、二〇一〇年の第六十二回大会で初めて設置され、今年で十二年を迎える。大会案内などに「日本漢文（日本漢学・日本漢詩文・漢文教育など）」と注記されているように、本部会は日本列島における古典中国語（漢文）を用いた文化営為を広く対象領域としている。発足以来、多くの充実した報告が行われ、現在、日本漢文部会は日本中国學會にとって無くてはならない存在になっている。今年度、本学会が新たに歴史部会を設置し、さらなる一步を踏み出すに当たって、日本漢文部会の十二年を振り返り、本部会の今後のあり方について考えるのは有意義なことであろう。そこで、このパネルディスカッションでは、日本漢文・日本漢学に関して、近年優れた研究を発表している三氏に報告をお願いし、日本漢文部会の「現在地」を示すとともに、本部会の対象領域に関する研究の来し方行く末を議論したいと考えている。

先ず、宋晗氏の報告では、平安朝漢詩文における「美意識」と「表現」の関係を取り上げる。平安朝漢文学に関しては、六朝隋唐文学との比較研究の豊かな蓄積がある。ただし、このような比較文学型の研究は、時に紋切り型の日中文化論に陥ってしまうことがあつ

た。そこで本報告では、詩壇の人間関係や相互批評に着目することで、当時の詩人たちが有していた「美意識」と彼らの「表現」の相互作用に分析の光を当てる。

続いて、韓淑婷氏の報告では、江戸期における儒礼受容を検討する。近世日本社会の儒礼の受容は限定的であったこともあり、かつては江戸期の儒礼の研究は盛んではなかった。しかし、この十年、江戸期の儒礼研究は大きく進展し、江戸期の儒礼受容を「例外的事象」として無視することは不可能になっている。本報告では、研究史を概括した上で、儒礼が政治的文脈の中で語られる事例に注目し、江戸期の儒礼言説の意味について考える。

最後の水上雅晴氏の報告では、パロディ作品に着目し、江戸期の俗文学と日本漢学について考察する。パロディ作品の出現は、広い範囲で共有されているテキストの存在を前提としており、日本において漢学に関わるパロディ現象が広く見られるようになるのは江戸期に入ってからである。本報告では、洒落本・落書・川柳などの通俗文芸におけるパロディを検討し、近世日本における漢学享受層の拡大状況の一端を明らかにする。

日本列島の漢学的諸文化を検討する（「日本漢学を考える」）だけでなく、それらを研究することで中国学研究に対していかなる寄与が可能なのか（「日本漢学で考える」）についても議論の俎上の載せることで、本部会と他部会との関係についても新たな視点を提示できらるであろう。

「特別展「早稲田の東亜貴重資料展」

会場 早稲田大学総合学術情報センター二階展示室（早稲田大学中央図書館）

期 間 二〇二二年一〇月七日（金）から十一月四日（金）まで

午前十時から午後六時開室（最終日は午後五時閉室）

※十月七日（金）から十月九日（日）までの大会開催期間は、国宝二点を出陳いたします。

一部資料は十月十一日からの展示になります。

この度、十月七日から十一月四日にかけて、早稲田大学図書館は日本中国学会の協賛を得て、「早稲田の東亜資料展」を早稲田大学中央図書館にて開催いたします。

本展覧会は、大きく二つのテーマから構成されています。

第一は、早稲田大学が所有する国宝『礼記子本疏義』・『玉篇』を代表とする、早稲田大学が所蔵する古典籍です。とりわけ今回は、初めて、早稲田大学所蔵の『玉篇』巻九残巻と、その欠落部分である京都国立博物館所蔵『玉篇』巻九部分を合体した画像パネルを制作いたしました。これにより『玉篇』巻九の復元した画像をご覧いただけます。ご期待いただけますと思います。

第二は、早稲田大学と近代中国との関わりを示す資料です。早稲田大学の創設者、大隈重信は、変法自強運動に失敗し、日本に亡命した康有為を高く評価し、早稲田の自宅近くに住まわせています。大隈が逝去すると、彼は一幅の書を大隈に捧げました。それが今回展示する書です。また、早稲田大学では、多くの中国人留学生が学び、中国の近代化に大きな役

割を果たしました。「鴻跡帖」は、明治三八（一九〇五）年に開設された清国留学生部の卒業生や中国人来賓が寄せた詩文・書画が綴られた冊子です。早稲田大学の中国学者を代表する津田左右吉も、清国留学生部の教員を勤めていました。

それぞれの展示資料を、人物たちのエピソード（故事）と合わせて紹介いたします。早稲田大学と中国との深い関わりに改めて注目していただくとともに、資料が持つチカラを感じて頂ければと思います。

なお、本展については、オンライン上からも「早稲田大学古典籍総合データベース」に搭載されている資料を御覧頂けます。詳細につきましては大会特設サイトにアクセス頂くか、左記のQRコードを読み取って頂ければ、特設サイトにアクセスできます。どうぞご高覧下さい。

【早稲田の東亜貴重資料展】特設サイト

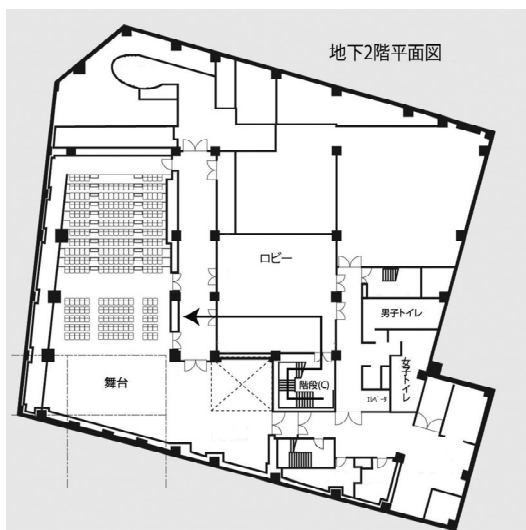


大会会場案内図

【早稲田キャンパス周辺図】

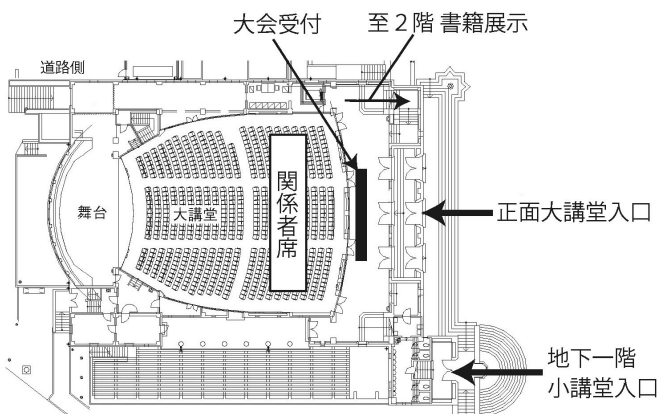


【小野記念講堂見取図】

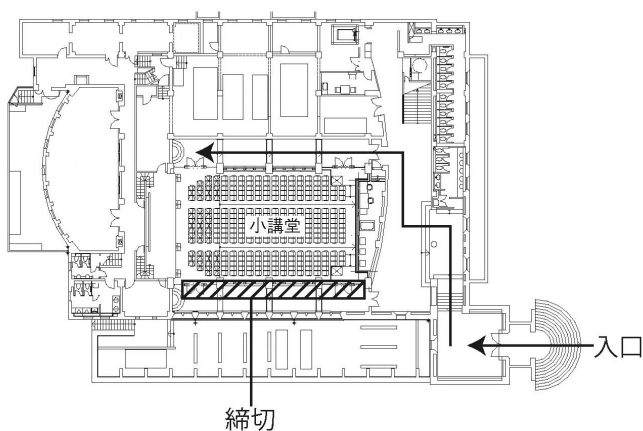


【大隈講堂見取図】

○1階 大講堂



○地下1階 小講堂



●大隈講堂・小野講堂はVR（ヴァーチャルリアリティ）で内部をご覧いただけます。会場確認にあわせてご利用ください。



←大隈講堂VR



小野記念講堂VR→

・予約の変更

予約のキャンセルや時間の変更などは、大会事務局までお早めにご連絡ください。

3. 利用当日の諸注意

①受付

大会受付に、託児窓口を設けます。料金をお支払い頂いた後、担当者が託児所会場をご案内いたします。原則として、お申し込み頂いた会員ご本人がお預け・お迎えをお願い致します。

②ご準備頂く事項・お持ち頂くもの

1. 保護者の身分証明書（運転免許証、健康保険証、母子手帳など）、受付の名札
2. あらかじめお送りする「託児サービス利用申込書」
3. お子様の当日お出かけ前の検温
(2の「託児サービス利用申込書」にご記入ください)
4. 託児に必要なもの（お食事・おやつ・ミルク・哺乳瓶・おむつ・着替えなど）

③お迎え

原則として、お預けされる会員の方がお願いいたします。

④ご注意

お預けになるお子様の体温が37.5℃以上など、体調が優れない場合は、お預かりできない場合があります。また、感染症等で登校・登園許可が出ていない場合はお預りできません。ご了承ください。

その他につきましては、あらかじめお送りします「保護者の皆様へ」を御覧下さい。

4. 問い合わせ先

大会準備事務局：japansinology74@gmail.com

ご不明な点がございましたら、お気軽にお問い合わせください。

託児所のご案内

今大会では、託児所を設置いたします。希望される会員は下記の要領で事前にお申し込みをお願いします。

1. 概要

・ご利用資格

本大会に参加される会員で、0歳児から未就学児までのお子様がいいらっしゃる方。

・業務委託先

早稲田大学ダイバーシティ推進室および学生部学生生活課を介して株式会社ポピンズファミリーケアに業務委託いたします。

・開設場所

早稲田大学早稲田キャンパス内に開設いたします。当日受付時にご案内致します。

・開設時間

10月8日（土）9：00～18：00

10月9日（日）9：00～16：00

・利用料金

半日（午前または午後のみ）：1,500円

全日：3,000円

※当日受付にてお支払い下さい。

・保険

万が一の事故に備えて、委託業者が保険に加入しています。補償については、保険会社の規定の範囲内となります。なお、日本中国学会ならびに早稲田大学は、事故等に対する一切の責任を負いかねます。

2. お申し込み

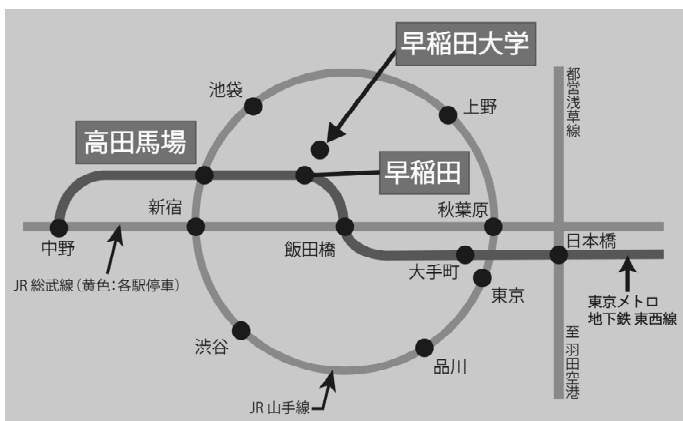
・予約方法

下記のQRコードを読み取って頂き、フォームにてお申し込みください。振替用紙での申し込みは受け付けておりません。

【託児サービス利用申し込みフォーム】



また、申し込み期限は、9月20日（火）までとなります。期限を過ぎてのお申し込みや、事前にお申し込みがない場合の利用はできかねますので、予めご承知おきください。



【大会会場】

早稲田大学 早稲田キャンパス

(大隈講堂 (大講堂・小講堂)・小野記念講堂)

【アクセス】

○東京駅からのアクセス

「東京」駅から地下鉄「大手町」駅まで徒歩約5分

地下鉄東西線で「早稲田」駅下車 (「大手町」から約10分)

「早稲田」駅から徒歩約5分

○新宿駅からのアクセス

「新宿」駅からJR山手線で「高田馬場」駅下車 (「新宿」駅から約5分)

①地下鉄を利用する場合

「高田馬場」駅から地下鉄東西線「早稲田」駅下車 (「高田馬場」駅から約3分) 「早稲田」駅から徒歩約5分

②都営バスを利用する場合

「高田馬場」駅から 都営バス [学02] 系統「早大正門」行に乗車 (「高田馬場」～「早大正門」間は約10分) 終点「早大正門」下車

※バスを利用されますと、大隈講堂の目の前に到着します。

〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1

早稲田大学戸山キャンパス文学学術院渡邊義浩研究室内

日本中国学会第 74 回大会準備会

E-mail japansinology74@gmail.com